
道の先には.....

神山 備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道の先には……

【Zコード】

N1006R

【作者名】

神山 備

【あらすじ】

何を思ったのか、異世界ファンタジーです。魔が差したとしか思えません。異世界にもし行けたらやってみたいことを、思う存分やる予定。

僕、宮本美久みやもとよしひさと会社の先輩鮎川幸太郎あゆかわこうたろうは仕事で郊外に出掛けの途中迷子になつて、運転している先輩と地図の読めない僕のどっちが悪いかで喧嘩を始めた。その時、車がものすごい光に包まれたかと思うと、すとーんと落下。? 何で?? 前に道あつたと思うんだけど

ど……次に気がついた時、僕らがいたのはモンスターと魔法のある世界だった。

そんな僕と先輩とあっちの世界の住人マシューとの『ゴボゴ珍道中』。

何気に、主人公チートかも。

4／25、完結を一旦はずして幸太郎スピノフ始めました。

4／27 なろう様の改訂に伴い、補足事項……毎度の事ながら、この作品は自ブログの他2箇所に掲載しています、すいません。

「だあーつ、もう一 セツぱぱつお前と来ると禄な事がねえ、」の疫病神！！」

そう言つて車のダッシュボードを叩くのは、僕の会社の先輩鮎川幸太郎。

「そんなん、道に迷つたのは僕のせいじゃないですよ
遠慮がちにそういう僕を先輩はぐつと睨んだ。

「富本、お前のせいじゃないって！？ この状態のどこが都内で頻繁に迷子になる地図の読めないお前のせいじゃないって言うんだ。
だから、ナビ付きの俺の車で行くって言つたんだ」

「でも、こんな山道で先輩の真っ赤なセリカちゃんなんて走らせたら、それはそれで何と言われるか……」

それで遠慮がちにそう言つた僕に先輩は間髪入れずに、「黙れ、ヘタレ富本のくせに。確かにこんな道で俺のかわいいセリカWXに傷でもついた日には、泣くにも泣けない。でも、こんな訳の解らないところで迷つよりは何ぼかましだろ」と、返した。

「けど、今回は地図見てないし、僕のせいじゃないですって…」

「うるさいつ！ 自分が地図見れないのを自慢するな！！」

そう言いながら不毛な言い合いをしているそのとき、ものすごい光に包まれたかと思うと、僕たち（正確に言えば僕たちの乗った車）はいきなり落ちたのだった。

何でだろ、たしかに前に道はあつたはずなのに……

僕たちはしばらくそのまま気を失っていたらしい、次に気がついた時、森の中にいた。落ちる前も山道を走っていたのはそうなんだけど、木の種類が全く違っていた。落ちる前に走っていた周りの木はいかにも日本らしい杉木立だつたけれども、今日の前にあるのは広葉樹。しかも、青々としている。それに、心なしか気温も高い気がする。

それに、落ちてきたはずの切り立った崖とか斜面なんてものはなくて、緩やかな丘みたいなものが遙か向こうまで広がっている。アスファルトで舗装された道は石畳になっているし、なにより確かにかなりな高さを降りたはずなのに、僕たちはもちろん、会社の車（先輩に言わせれば廃車寸前のポンコツ）にもぜんぜん傷なんか一つも付いていなかつた。

「おい、富本、乗れっ」

それを確認した先輩は、そう言って車に戻る。慌てて僕も車に乗ることエンジンをかけ発進させた。

「ちゃんと走るみたいですね」

「ああ、ポンコツの割には上等じゃねえか」

先輩はそう言つてさらに車を走らせた。

しばらく行くと道ばたに大きなリンゴの木が見えてきた。真っ赤な実が所狭しとひしめき合つている。

「そう言えばお腹空きましたね。あのリンゴ食べましょうよ

「富本、お前の頭には食うことと寝ることしかないのか？」

「そんなこと言つたつて、お腹空いたんですから。それに、こんな道ばたにぽつりと植わってるんだから絶対に野生ですよ。採つたって誰にも怒られないと思います」

呆れる先輩に僕は胸を張つてそう答えた。どう言つたつて先輩は僕をバカにするだろうし、それなら開き直つて空腹を満たす方が建設

的だと思わない？

「じゃあ、お前勝手に行って採つて来い！ 僕は知らん」
先輩はそう言つと、僕をリンゴの木の端まで戻つて降りしてくれた。
僕は僕の背でも届くところになつていてる実を三つ四つ採り、その
内の一つにかぶりついた。

「うー、おいひい

間違いなく完全無農薬のそれは、僕が今まで食べたリンゴの中で一
番美味しかつた。

しかし次の瞬間、僕は

「ぎやつ！－

という、悲鳴を上げた。

「富本、どうした？ やっぱり毒リンゴだったのか、それ」
その悲鳴を聞きつけて先輩は後から考えるとあんまりな台詞を吐き
ながらそれでも降りてくれた。

「違いますよ、ほ、ほらアレ……うわあ！－」

そのとき、震える僕に向かつて、そのゲル状の物体が突進してきた
のだった。

先輩はとつさにその辺にあつた木の棒を持つて構える。某ド〇ク〇の初期アイテム『ひのきのぼう』つていうのがあるけど、さしづめこれは『りんごのぼう』つてところだろうか。何にしても再弱アイテムには違いない。確か剣道2段の先輩は格好に反して意外と素早いゲル状を、それでバンバンぶつ叩いている。何をしても様になる人だと思う。

そのとき、先輩がぶつ叩いているのとは別のゲル状が僕の足にまとわりついてきた。ひえ～っ、キモチワルイ！！ 僕は全身総毛立ちながら、そのゲル状に自分の食べていたリンゴをぶつけた。そして自分の手でもげる範囲のリンゴを次々ともぎとつて、ガンガンゲル状に投げつける。

「富本、もういい。これ以上やつたら、リンゴがもつたいない」
しばらくして、そう言いながら先輩が僕の腕を抑えた。

「僕がどうなつてもいいつていうんですか」

「どうなるつて、どうもならんだる。もうこいつとくにノビてるし」

だって、こんなアンデットっぽい奴、またすぐ復活して動き出しそうな気がするんだもの。そう言おうとした僕に先輩は、

「でも、お前思ったよりもなかなかやるな。さしづめ技名は『リンゴ乱舞』ってどこか。ガキ大将に泣きながらめちゃくちゃな攻撃加えるチビガキみたいで、なかなか良かつたぞ」と言った。一応褒められているみたいだけど、そんな褒め方つてなんかウレシクナイ。

とにかく、投げたリンゴを回収して（だって、そのまま放置したつて腐っていくだけだし、それなら洗って食べた方が……）車に乗せると、先輩はそれを見て鼻で笑った。その時、ちょっと離れたところから

「Help help me!」

と、ちょっと訛った英語で助けを呼ぶ声が聞こえた。僕はその声を聞くと、自分のスキルなんてものは一切無視して、そこに走り出していた。

「おいこら、宮本！ 待てよ！！」

それを見た先輩がやれやれと首を振りながら、今度はトランクを開けて車から修理用のスパナを取り出し、僕の後を追いかけた。

変な第一村人？ 発見

僕たちが駆けつけると、声の主は茶髪で碧眼の男。大きな荷物を今度は犬？ みたいな（そう言つにはかわい氣のない）奴らに取られようとしていた。その男自身結構がたいもテカくて一匹ぐらいなら振り切れるんだろうが、相手は4匹もいて、その中の一匹が指揮して集団的に動いているという、なかなか獸とはいえ賢そうな連中だった。

僕はそのときになつてやつと、自分が「」を車の中に全部置いてきたことを思い出した。

「富本、お前は下がつてろ！」

僕がそのことに気づいてあたふたしていると、先輩はそう言つて、スパナで犬もどきをボカボカと殴つてあつと言つ間に退散させた。

【助けてくださつて、本当にありがとうございました。この中には王都にもつて行かなきゃならんでえじな手紙が入つていたもんで、焦つたですじや】

その男の人は何度も頭を下げながら早口口に言つた。

【オウト？ オウトつて何？】

【王都と言えば、王都グランディーナに決まつてつてでしょ？ おかしなことを聞かんでくだせ】

「先輩、この人変です」

「さつきから出てきている変な化けもんと言い、この外人と言い、確かに妙だがな、俺に言わせりやお前も変だ。大体俺には何を言つてるのかさっぱりわからん。そんな男とちゃんと会話できているお前つていつたい何だ？」

「えつ、先輩わからないんですか。この人王様に届ける手紙を守つてくれたつてお礼言つてるんですけど」

「お前こいつがしゃべつてることわかるのか？」

ものすごく驚いてそう言つた先輩に、僕は逆にビックリしながら頷いた。確かに早口だったし、ものすごく訛つてゐるけど、この人のしゃべっているのは基本英語だ。それがわかれば、時々くるう文法を少し修正すれば内容はつかめる。

「だつて、この人のしゃべつてるの英語ですよ」

「英語?」

「ええ、かなり訛つてますけど」

「富本、お前帰国子女か?」

「いいえ。大学英文科でしたけど、外国なんて一度も行つたことがないですよ、僕」

「じゃあ、何で解るんだ?」

「僕授業ちゃんと出てましたもん」

外国に行つたことがないと言つた僕に信じられないと目を瞠つた先輩に僕は胸を張つて答えた。

「……とにかくだな、この男が変なのかお前が変なのかもう少し行つてみれば判るだろ。おいそこの、お前も乗れ! …… Ride in this car」

先輩はひとしきり頭を抱えてから、そう言つて男に車に乗るように強要した。

【この車に乗つてくださいと言つてます】

だけど、先輩に車に乗るように言われてもきょとんとしている男に僕が通訳する。

【コレに? 馬のない馬車に……ですか? 勇者様方も、モンスターに襲われて馬を盗られたんですね。それでいらを助けて下さつたんかあ。ここでまず一休みしてから出発つてことですね。んじやま、Lady】

男はそう言つて、先に僕が乗り込もうとしていた助手席のドアを開けると、僕の手を取つた。そして、僕が乗り込むとおもむろにドアを閉め、自分は後部座席のドアを開けて荷物をドンと放り込むと自

分も乗り込んだ。僕は勇者様とLadyという単語にすぐ嫌な予感がした。その部分だけは先輩も理解したらしく、僕の顔を見てぶつと吹きながら車に乗り込む。

【で、これからどうするんですかい】

それから身を乗り出しながら聞いた男に、先輩は答える代わりにエンジンをかけ、思いつきリアセルを踏んだ。

【ば、馬車が……馬もないのに走って…… めやあ、お助けを！
！】

続いて車の中には、僕たちが駆けつける時に聞いたよつさうにひもつた悲鳴が響きわたったのだつた。

異世界トリップ決定

車の中には晴れやかに笑う先輩と、恐怖でゆがんだ顔の男。やがて僕らの行く先に、見慣れないヨーロッパ風の田舎町が見えてきた。

【リルムの町だ！】

それを見て男はひきつったまんまでちょっと綻んだ。逆にそれを聞いた先輩の方が苦虫を噛みつぶした顔になって、車を停めた。
「やっぱり、さっきの光で僕たちの方がとばされたみたいですね。異世界トリップってやつですかね」

思案顔で僕がそう言うと、先輩は僕の頭を叩いて、「何、冷静に分析してやんだ。つたく、やっぱりお前と一緒にいると碌なことがない」とハンドルに突っ伏した。

「だからあ、先輩が運転してたんだし、僕の所為じゃないですって！」

「つるさい、黙れ！！ なら俺の所為だとでも言いたいか」「別にそんなこと、言つてないでしょ！」

だけど、僕たちがいつものように言い合いを始めた時、はじめは呆気にとられていた男がクスクスと笑い出した。

【おい、何笑つてんだ。それと、お前名前は？】

【マシュー、マシュー・カールっす】

すると先輩はむつとした顔のまま男に聞いた。

「先輩もこの人の言葉判るんですけど？」

「お前がさつきこいつのしゃべってるのは英語だつて言つたら。お前にできることが、俺にできない訳あるか！」

僕が驚いて聞き返すと、先輩はそう言つた。でも、よくよく考えてみると、名前聞いただけなんだよね。それだったら誰でもできる…なんてことは口が裂けてもいえないけど。

【で、勇者様方のお名前は】

【俺？ 俺は鮎川幸太郎。あ、「コーラー・アユカワ、わかるか？】

「〇—〇—〇・コーラル、コーラル」

「コーラー」

「「コーラ」

「ま、これが限界か。OK」

マシューは頷くと今度は僕を指さしたので、

【僕は宮本美久。ヨシヒサ・ミヤモト】

「ヨシヒサ？」

「ヨシヒサー！」

「ヨシヒサ？」

「よつしゃ、よつしゃそれでいい」

ヨシヒサと言つたマシューに、先輩はうなづきながらOKを出す。
「勝手に決めないでください。よつしゃよつしゃって、何十年か前の政治家じゃあるまいし、良い訳ないでしょー。」

名前を聞かれてるのは僕なんですから。

「お前も古いな。じやあ、音読みでビクとでも呼ばせれるか

「音読み？ ヨシヒサでもあるでしょ？」

まあ、ヨシヒサよりはまし……そう言いかけた僕に、マシューはビクといつワードで反応し、

「Oh~ヴィクトリアー！… OK、OK

と満面の笑みで理解？ を示した。

だけど、ヴィクトリアって……

【ダメです、やっぱリダメ！！ ヴィクトリアって言つたら女性の名前じゃないですか。ダメ、Not Victoria! I'm not female!!】

「Not female!？」

慌てて訂正した僕に、マシューは皿をまん丸にしてせつ聞きを返した。

ああ、こんなに美味しいものが……だなんて

【男お……】

【そんなにびっくりすることないでしょ！？ 僕ちゃんとスカートなんか穿いてないじゃないですか！】

【そりや、勇者様の連れなんだから、お忍びの姫様のかなあとか……】

女性に間違われていたことに激怒する僕に、マシューが遠慮がちにそう言った。その目はどことなく傷ついた風。そして、

【バカ、こいつがそんな品のいい顔してるか？】

【確かに上品とは言えないかもしだれいけど、かわいいじゃないですか。コータロと並ぶとお似合いです】

先輩がいつものように僕をじき下ろすのに同調して、何気に酷いことをさうっと言つてのける。「うう、確かに165cmの僕は、183cmの先輩やほほ変わりないだろ」マシューからすれば小柄だけね、

【げつ、こいつとお似合いだなんて言つたな！】

すかさず先輩が言つ。でも、それはこっちの台詞です。

【そりや、妙な光に包まれてこっちに運ばれてきたねえ。あんたたちこれからどうするね】

それから、僕たちはマシューにここに運ばれてきた経緯を捶い揻んで話した。マシューは僕たちが別に高貴な出自でもなく、歳もさして変わらないことが判ると幾分碎けた口調になっていた。だけど、元々敬語が曖昧（日本語が厳密すぎるのか）な英語では大して変化はないのだけれど。それに、マシューが僕たちを高貴な出自だと勘違いしたのも、その口語というより、ブリティッシュティングリッシュな日本の英語教育が原因なのだろうし。

大体、僕だつて私だつて、こちちぢゅ全部 I my meだ。そ

れが間違いの根元だつて気がする……つて、英語にハツ当たりしても仕方ないのだけどね。

【とにかく、腹が減つていてはなんもい考えは浮かばんて、リルムの町で腹¹」しらえといくか】

マシューに促されて僕たちは町外れで車を降りると（馬のない馬車なんかに乗つていたら、絶対にドン引きされるとマシューが言つので）リルムの町に入った。

【お、良いぞ。今日は市が立つて】

見ると町のショボいメインストリートにはいくつかの屋台が出ていた。

「プリンだあ！」

その中に僕は『Mon Pudding』といつ看板を見つけて色めきたつた。車のないこの世界には当然プラ容器なんてものはないらしく、極小のブリキっぽいバケツに黄色いフルプルが収まっていた。

【それ二つ】

すると、その声を聞いたマシューがプリンを買って僕たちに手渡してくれた。

【助けてくれた礼だ、食え】

【うわあ、ありがとう】

僕はそれを受け取ると、添え付けの木の棒で掬い取つて口に入れる。予想通りと言つて、予想以上の美味しさ。

「んまい！ 幸せだあ～」

思わず日本語でうなつてしまひ。

「相変わらず、おまえの幸せはお手軽だなあ。ま、なかなかいけるがな」

先輩もまたどうでもない様子。

【ぬいか】

【はー、とつても】

味を聞いてきたマシューに僕はぶんぶんと首を縦に振つてやう答えた。でも、僕の頷きにマシューが言つた
【やうだろ、そうだな。】には本当に良いスライムがいっぱい
とれるからな】

の一言で、僕と先輩は互いの顔を見合させて固まつてしまつた。

「す、スライム……？」

「お、おえ～っ…」

僕が素つ頓狂な声を上げると同時に先輩が吐いた。あんなに美味しかつたプリンの原料がほんのつこさつき戦つたあのゲル状だったなんて……

「ショックだ……」こんなに美味しいものがスライムでできているなんて……

「つていいながら、お前まだ食つてんじやねえか。一体どんな神経してんだ」

ショックだと言いながらどんどんと食べ続ける僕に、先輩は蒼い顔をしながらそう言つた。

「だけど、こんなに美味しいんですよ。それに、途中で捨てるなんてもつたいないです、そんなこと僕にはできません」

そのあとも僕は、

『何でこんなに美味しいものがスライムからできるんだ』と繰り返しつぶやきながら、先輩の分のプリンも平らげただつた。

食堂にて

それから気を取り直して、僕たちは町で唯一の居酒屋兼食堂らしきところに入った。さすがにちゃんとした店構えならそんなに妙なものは出でこないと……信じてマシューに注文してもらつ。ただ、先輩は料理と一緒にちやつかりビールを注文していた。

「先輩、これからまだ車に乗るんだつたら、飲酒運転はダメですよと僕が奢めると、

「うるさい、これが飲まずにやつてられるか。それに、車の存在している社会で飲酒運転もクソもあるか

と逆ギレした。言われてみればそうかも。たくさんあるからルールが出てくるのであって、僕たちが乗っている車一台しかなければ、そんなものできる訳がない。

やがてやつてきた料理を僕たちは一切聞かずに食べた。もし聞いて、その材料にさつきマシューが襲われていた『犬もどき』やその他奇妙なモンスターなんかが使われていることが判つてしまつたら、僕たちは餓死しかねない。僕はともかく、先輩はその可能性大だ。その証拠に、先輩はさつきからベジタリアンに宗旨替えたのかと思ふほど野菜しかつつついていない。

それでも何とか食事らしいものを終えると、先輩は徐にタバコを取り出して、ライターで火をつけた。それを見てマシューが驚く。

【「一タロ、あんた剣の腕もあるのに、魔法も使えるのか?】

【は? ああ、これね。まあちょっとな】

先輩はマシューがまじまじと見ている、今度の新商品につける予定だったロイヤリティーのライター（つまりタダもらいの品物）を手のひらで転がして不敵な笑みを浮かべた。

「先輩っ！」

「何だ、富本。お前何か言いたそудだな」

「先輩、コレって要するにおまけじゃないですか。そんなんで魔法

「堅いこと言つくなつて。あつちが勝手に勘違いしてんだから」と、
使ひこいつになんかしてると後でイタい目に遭いますよ

「堅いこと言つくなつて。あつちが勝手に勘違いしてんだから」

やがて、先輩が一服し終わり、僕たちは席を立つた。

【あのお、お代は】

【はい、75ガルドになります】

そして料金を尋ねた僕に、店のおかみさんは愛想の良い笑みを浮かべてそう答えた。そうか、75。ずいぶん安いな。えつ？ 75…

：75ガルドお…！

「先輩、通貨単位が違つ…」

「そりやそつだろ。言葉が通じない世界で、金が一緒なわけないだろ」

持つているお金が使えないこと気づいて慌てる僕に、先輩は平然とそう返す。

「じゃあ、どうして払つんですか！ マシュー、まつかり払わせられないでしょ？」

「何なら、お前が身体で払つ？ お前なら高く買ってもひさえそうだぞ。何せビクだもんな」

続く僕の言葉に、先輩はそう言って高笑いした。

……やつぱりこの人、鬼だ……

敏腕営業マンの鍊金術？

【田那、お困りですかい？】

その時、店の奥から、ひとりの男が僕たちに近づいてきた。『さ
れいな身なりをしていて、隙がない。旅人のかかそれとも王都あ
たりの商人で、この町に来ているのか、何にしてもこの田舎町には
似つかわしくないギラギラとした目つきをしていた。

【良けりや、あっしがお出ししやすよ】

と、続ける田線の先には先輩が握っているライターが……えつ、そ
れがあ田当てなの？

【ふつ、あんたもこれが田当てか。安くはないぞ】

一応、先輩の名譽のためにライターとか言つたけど、実はアウトド
アグッズの販促品であるそのチラシカマンを握り直して、先輩はそ
う言つてニヤリと笑つた。そうやつて見てみると、あの形はマジック
クロツドみたいに見えないこともないし、『キャンプのお供に…
ファイアメイト』のロゴは、日本語なんて知らない彼らには何かの
詠唱呪文を刻んでいいようにしか見えないかも。けど、安くはない
つて……元々タダでじょうが！ 先輩、どんだけふっかける気なん
だろ。

【数は用意できぬでじょうかね。そしたらそれ相応の物はこち
らも用意させてもらこやす】

【わかった、じゃあ5つ6つ用意しよう。ただ、貴重品だからな
、しかるべき所に隠してある】

車の中に問題のマジッククロツドもどきは100個以上あるって言
うのに、先輩はそう言つて、一人先に店を出た。僕に日本語で、
「つけられなこよつて、お前はこじてあいつを見張つてお
と言ひ残して。

先輩が戻つて来て、僕たちはリルムの町の旅館の男が泊まっている部屋に行つた。そこは回復系の木の実やら、石化防止のペンダントやらがいっぱい。僕が興奮しつぱなしで、一つ一つ眺めているのを先輩は些か冷めた眼で、マシューは幾分呆れた顔で見ていた。だつて、これつてリアルRPGのオンパレードじゃない！ これが興奮せずにいられますかつて！！

僕はその中に古ぼけた本が一冊あるのを見つけた。何が書いてあるのか見ようと開いた僕に男は言った。

【止めたきな、そいつは持ち主を選ぶんだ。大抵の奴は読めもしねえよ】

先輩にはへつらつてているクセに、随分と僕にはタメ口なんじやない？ なんて思いつつ、

【へえ、そうなの】

と返しながら、僕はパラパラとページをめくつて、

「火に関する呪文かあ…… fire ball <火の玉>つて、笑えるう

と声を出しながらその本を読む。それを聞いて男はあるか先輩やマシューまでもがギョッとして僕を見た。そして僕はその本の冒頭部分にあつた『注意書き』を参考に『こめかみに意識を集中』して、もう一度、

「火の玉」fire ball！」

と詠唱した。胸の前に広げた手にぽあつと赤い玉が生まれる。だけど、起こつたことにビックリして気がそげちゃつたのか、それはすぐ消えちゃつたけど。

「うわっ、これつてますますリアルRPG！」
と一人はしゃぐ僕に、後の3人の大の男は完全にフリーズしていました。

【お前、魔女なのか……】

しばらくしてから、やっと気を取り直して男がそう言った。僕は『

魔女』とこうワードにちょっと『またか』と思いつつも、

【そうみたいですねえ、僕、超ド級の初心者ですけど】

と男に返した。

で、目立たないようにこつち仕様の服とか、ちょっととした武器などをチツカマン計10本で購入。その中にはちゃんとさつきの『魔道書』（チツカマン3本相当）も含まれている。

僕はホクホクでその本を読みながら宿屋を出た。先輩はマシューに先に小声で耳打ちしてから僕に、

「こら、読みながら歩くな。転ぶぞ。それにな……」

「町のはずれまで来たら、一気に車まで走るぞ。その本を俺に渡す

か、小脇に抱えてろ」

と言った。別に声のボリュームを下げるなくたって日本語なんだから、ここの人には誰も解りやしません、とか思いながら僕は小脇に本を抱えた。

そして、町外れに来た僕たちは、一瞬3人で顔を見合せると、車に向かつて一気に駆けだした。

* - * - - *

僕たちが走り出した途端、慌てて追いかけてきた一団があつた。

総勢10名ほどか、さっきの商人が差し向けた者だろう。目的はたぶんあのチツカマンだ。先輩が一人で取りに行つたのを見て、まだ隠し持つていると思ったに違いない。確かに希少価値と言えばそういうかもしれないけど、なんだかなあ。

そんなに足は遅い方じゃないはずだけど、彼らは普段車なんか乗らずに生活してるんだろうから、かなり早くて少しづつ間合いを詰められている気がする。このままじゃ、車に乗って発進するためのタイムロスで追いつかれてしまつ。何か彼らの足を止める方法は？

その時僕が小脇に抱えている本がきらりと光った気がした。『君、持ち主を選ぶんだよね。僕を持ち主だと思ってくれているなら、助けてくれない？』と僕は本に囁きかけると、走るのを止め、追っ手の方に向き直ると『魔道書』をぱつと開いて、そのページを見る。

やつた！ 停止魔法だ！！ 僕は、

「汝の影よ、その大地に貼り付け！ STOP!!」と囁えて、彼らをじっと見据えた。追っ手はまるで『だるまさんがこじろん』で鬼に見られた時のようにぴたりとその場で動きを止めた。

「富本何をしている。早くこっちに来い！」

その様子に、先輩が慌ててそう叫ぶ。

「だ、ダメです。僕の今の集中力では、一瞬でも眼を離したらそこで術は切れます。だから、先輩が車を取ってきてここまで回していください」

「お、おう分かった。待ってる」

先輩は僕のその言葉にそう言って、マシューに車に向かうように促した。そして車に乗り込むと、先輩は旋回しながら僕の前にピタリと車をつけた。その間約20秒。僕が眼を離すとすぐ、金縛りが解けた追っ手が慌ててまた走ってきたけど、僕が乗り込むのがわずかに早かつた。先輩は僕が乗ったのを確認するとドアを閉める前にアクセルを全開で踏み込んで……一気にリルムの町を後にした。

【ここまでくりやもう大丈夫だろ、ふええ、助かった】
しばらく走ったところでマシューがそう言つたので、先輩は車を停めた。

【それにしてもビク、お前すごいな。いきなり魔法を使いこなすか？】

【えへへ、あれは何でもいいから相手の動きを止められたらって思つてページを開いたら、たまたま停止魔法のページだつたってだけです。偶然ですよ】

ビクと呼ばれるのは幾分不満だけど、褒められるのはなんだか悪い気はない。そしたら、隣に座っていた先輩が

僕の髪をわしづと掴んで

「いい気になるんじゃねえ」

と言つたので、僕はふくれつ面で先輩をにらんだ。

「大体、俺に命令するなんざ、一〇〇年早いんだ。ヘタレ富本のクセに」

「でも、あの時には敵の動きを止めなきゃ……」

「だからって、できるかどうかも判らない魔法で乗り切りろうと思ふ奴があるか。まったく、寿命が縮まるかと思つたぞ」

先輩はそう言いながら、髪を掴んだままあらつぱく僕の頭をなで続ける。ああそうか、先輩心配してくれてんだ。

「先輩、ありがと」

「ま……解ればいいんだ、解れば」

その時、マシューがうん、と一つ大きな咳払いをして、

【俺に判る言葉でしゃべつてもらねえかな。どうせさつきから自分
が邪魔者みたいな気がして、しようがない】

と憮然とした表情でそう言つた。

【邪魔者って……ただ、いきなり魔法を使ったのを叱られているだ

けです】

【「一タロが怒つてゐる? 言葉が解らない俺からすれば、見つめあつて愛を語り合つてゐる様にしか見えなかつたぞ】

【マシュー、氣色悪いことこのうな! 何が悲しくて男に愛を語らなきやならん】

それは、こいつの台詞!

【いや、愛があれば性別だつて乗り越えられるのかなど……】

【マシュー】

ぼそっと小声でそう言つたマシューを僕はキッと睨んで、パラパラと『魔道書』のページをめくる。

【わあ、どれにしようかな】

その言葉に、マシューはもうろん先輩まで蒼くなる。

「おこ、止める富本。こんなところで魔法なんか発動したら、このポンコツが爆発しちまつ!」

【えつ、それがどうしたの? どうせポンコツでしょ?】

それに対して僕は笑顔でそう返しながら手を胸の前に繰り出す。その仕草を見て、先輩とマシューは同時に叫んだ。

【ひえーつ、魔女様お助けを!】

……だから、魔女じゃないつてば……

僕は指をこきこき鳴らしながら笑みを浮かべていた。でも、魔法を使おうとした僕は急にめまいがして目の前が真っ白になつた。次に目覚めた時、僕はちゃんと宿屋のベッドに寝かされていた。「目、覚めたか。急に目を回すから心配したぞ。マシューが言うには、魔力の使い過ぎだそうだ。初心者が時空系の停止魔法なんつー上級魔法をいきなり複数にかけるなんぞ、今まで聞いたことがないつてよ」

「どうか、MP切れつて訳か。元々ほとんどMP自体が少ないのだろうし、

「あ、ありがとうございます。ちゃんと運んでくれたんですね」「感謝してくれよ、マシューはあんな団体してるので、実はちつとも力がないしで、結局俺が一人でここまで運んだんだからな。それにしても、おまえ重いぞ。抱き上げた時、腰が折れるかと思つた」「すいません、重くて。でも、僕は先輩がいつも抱いているような、女人みたいに軽くはないですよ。なんせ男ですから」

『男』というワードに力を込めて僕が言つ。

「うそそうぞ、重かなかつたよ。ははは、魔女発言をまだ根に持つてんのかお前」

「当たり前でしょ？ それよりマシューは？」

「そう言えばマシューがいない。マシューが居たら、『また俺の分からぬ言葉で一人こそそこそしゃべつてる』と拗ねられかねないほど、日本語で会話している。

「あ、さつきなんかぼそぼそと訳の分からない」とつぶやきながら出かかるつて言つて出てつたが

そんなことを話していると、マシューが戻ってきた。

【ビク、気が付いたか】

【うん、たつた今】

【ほー、コレ】

マシューはそう言ひつと、真っ赤な実を僕の手の上に乗せた。

【何なのコレ?】

【これは、ガザの実だ。魔力の回復に効果がある。食え】

【買つたの?】

【いや、そこの森で取つてきた】

【わざわざ取つてくれたの? うわあ、ありがと!】

【あ、いや、礼なんかい】

僕が、お礼を言つと、マシューは赤い顔をしてもじもじしている。

【何? 僕何か変なこと言つた?】

「おい宮本、お前がそんな殺傷能力のある笑顔なんかしてやるからだ。しまいに押し倒されるぞ」

それを見ていた先輩が、ぶつと吹き出しながらさう言つた。うー、

何考えてんだか、この先輩は。

でも、真っ赤な顔をしているマシューのこと、ちょっとかわいいとか思つたりして……

僕、ちょっとヤバいかもしれない。

僕、視力検査が必要ですか？

自分のそんな感情を振り払うかのように、僕はガザの実をがりつと大きな口で齧った。酸っぱい！ それも梅干しなんて目じゃないくらい目から星が出てきそうなくらいの酸っぱさで、思わず口が歪んだまま固まる。

「ふ、ふつはい！」

真っ赤な色からは想像できなかつたその味に驚いて、僕は思わず嚥まずに飲み込んでしまつた。

【あ、ごめん。不味かつたか？ 僕、味は知らなかつたもんで】
その様子に、マシューが慌ててそう言つ。そつだよな、見るからに体育会系の（その割には非力らしいけど）マシューが魔法系の回復アイテムを食べることなんてないんだろう。よく、こんな実の事を知つていたなと思った。まあ、こつちの方では食べなくても基本のアイテムなのかもしれないけどね。

【ううん、ちょっと（実はかなりなんだけど）酸っぱかつただけ。心配しなくて、えつ？……！】

それに対しても心配しないでと言おうとした僕は驚いた。目の前にいたマシューがいきなりかわいい女の子になつていていたのだ。歳はたぶん、10歳前後。同じ茶髪で碧眼なんだけど、髪は長くて緩やかにウエーブがかかっている。

【ど、どうした？ そんなに穴のあくびりこ見つめられると、いくら俺でも照れるぞ】

だけど、そう見えたのは一瞬で、そう言つた彼は相変わらずいかついおつさんだつた。

【ほ、僕疲てるのかな。一瞬マシューが女の子に見えた……】

【は？ どこをどう見たらこいつが女の子に見えるつて！？ おみさん丸出しだろうが】

それに対して、先輩は息も絶え絶えに笑つていて。マシューも

【昨日の仕返しか、俺のどこが女だ。しかも女の子?】

と、怒つてはいるが、どことなく焦つてているような気もする。

「使つたことのない魔法を使って、頭いかれたんじゃねえか? も

うこのまま飯食わないで寝ろ!】

「えーっ、こ、飯は食べますよ。僕MP切れで倒れたんですよ。食べなきゃ回復しませんよ!】

先輩のご飯抜き発言に、僕は猛抗議した。でも、日本語のわからぬ

いマシューは心配そうに僕たちを見つめる。それに気づいた先輩は、

【心配すんな、大丈夫だよ。この食い気バカが簡単にくたばるか。

飯抜いて寝ろってったら、怒つてんだよ】

と説明している。その説明も説明だけど、それに対しても大きく頷いて納得するマシューもマシューだ。

うー、僕病人なのに……みんな大っキライだ!!

しつかり食べてぐつすり眠った僕は、翌日すっかり元気になった。魔力が完全に回復したかどうかは全然判んないけど、何だか今朝はどんどんと力が湧いてくる気がする。あのガザの実つて、実は強壮剤？ マシューがいきなりかわいい女の子に見えちゃつたりするし。

朝食を食べ終えた僕は、先輩から“悲しいお知らせ”を聞く。どうやらあの通称ポンコツ（正式には社用車だけど）のガソリンがもう残り少ないと呟つ。

【たぶん、次の町までは保たないだろ？。だから、ここに置いていく】

自家用車は、ガソリンなればただの鉄くず……。よリまだ性質が悪い。中途半端なところでエンストしてしまえば道を塞ぐし、車を知らないこの世界の人の好奇の目にさらされる。悪くいけば山賊あたりにバラバラに解体されてしまつかもしない。先輩の言うことはもつともだけど、気楽に着替えなんかの荷物は載せておけるし、何より僕らは営業と言つたつて普段は電車や車を利用しての間つなぎの徒步だ。そんなに長い距離を歩いている訳じやない。あまり急な山道なんかはないみたいだけど、次の町まで歩き切れるのか？

【仕方ないかあ……】

僕はそう相槌を打ちながら、ふと道端の屋台に目が行つた。その屋台は、軽く干した魚をフリッターにして売つてゐる。

「富本、お前朝あんなに食つたのに、まだ食つつもりか？」

屋台の揚げ用の大鍋を凝視してゐる僕に、先輩は呆れ顔でそう言ったけど、僕はそれに返事をせず、逆に店のおばさんに

【この揚げた後の油つてどうされるんですか？】

と聞いた。するとおばさんは、

【えつ、コレ？ 捨てるだけだけど。カスは肥料にもなるけど、油

は使いようがなくつていつも困るのよ】

頭を抱えるようなポーズをしてそう答えた。

【じゃあ、僕がソレ、いただいていいですか？】

【持つていつてくれれば、こっちも助かるよ。そこの樽がそっただから、好きなだけ持つてきな】

おばさんはそう言って、路地の隅に置いてある樽を指差した。

【じゃあ、樽」と頑いていきます】

【樽」と！？ こいつ何に使うんだい。言つとくけど、もうそんなのじや何も食えるもんは揚げられないよ】

【別に食べませんから、大丈夫です】

驚いてそう言つおばさんに、僕は笑顔でそう答えると、

【さあ、樽をひつくり返すのを手伝つてください。転がしていくますよ】

と、先輩とマシューに言つた。先輩は慌てて

「お前、まさかこれをあのポンコツに入れるつもりじゃねえだろ？」
と言つた。

「ええ、そのまさかです」

僕は、先輩にそう言つと、先輩は憮然とした表情で

「確かにそういう車が一時話題にはなつてたが、あれはソレ用に改造してはるはずだ。お前、完全に壊す気か？」

と返す。それに対しても僕はマシューに、

【マシュー、ここから王都グランディーナまではあと50のマイル（
80km）くらいつけて言つてましたつけ】

と聞くと、マシューは

【ああ、あと町3つだからそれくらいだらうな

と言つた。

「何もそのままで入れるつもりはないですよ、先輩。まあ見てください

僕はそう言つて、首をかしげながら樽を押していく一人の男の前を

鼻歌交じりで先導していく。

文系のガソリン捻出大作戦 2

車の前まで樽を運んでもらつた僕は、その樽を凝視し、中身だけに集中する。

「よし、ロックオンっと

「何をやるつもりだ

「先輩、石油っていうのは、太古の生物が化石になつて液状化したものですね。僕、文系だから詳しくしらないんですけど」

「は？ 僕も文系だしよく分かんねえけど、そうだったかな」

「じゃあ、それ再現しちゃえば良いんですよ

「再現つて……」

どうやつたら再現できるつてんだ？ と頭の中に疑問符を一杯蓄えているのが丸分かりの先輩と、日本語で会話しているので、意味が分からず（もつとも英語で説明したつてこの世界のマシューには内容が理解できるとは思えないけど）僕の出方を見守っているマシューを後目に、僕はもう一度樽の方に向き直つて、

〈汝その嘗みを止め、石となれ。Stone!〉

と、中身を石化させ、

〈Press〉

と圧縮させる魔法を発動させる。それから、

〈時の流れよ、汝の中で光陰の如く駆け抜けよ。Still!〉

と、樽の中身の時間だけを一気に進ませた。

「さてつと、一億年ぐらい進んだかな

「一億年！！」

「先輩、中身が液状化してるか確かめてください」

僕は一億年という途方もない数字に驚いている先輩にそう指示した。

先輩は、

「富本の癖に、俺に命令なんかするな」と言いつつ、素直に僕の指示に従う。樽の栓を抜くと、嗅いだこと

のある揮発性の香りがあたりに広がった。

「う、ウソだろ？ ホントにガソリンが出来てんのかよ」

「じゃあ、入れましょう」

僕はそう言つと、車のガソリンタンクの栓を開いて、高く手を挙げると、

「汝その重さを天使の羽の如くし、我の手の動きに従え。Move！」

と唱えると、樽は軽々と空中に浮き、自分からガソリンタンクにその中身を注ぎ入れた。こぼれてしまわない程度で僕は手を下に控る。樽はゆっくりと元の位置に戻った。

「はあ、終わった」

その途端、達成感と共に、急激な疲労が襲ってきて、僕はその場に膝をついて崩れた。

【ビ、ビク！】

そこでかかっていた魔法が解けたかのように、今まで固まっていたマシューがものすごい勢いで駆け寄ってきた。

【ねえ、大丈夫？ 賴むから無茶なんてしないで！】

と、涙目で叫ぶその声は、いつもの低い声ではなく、高く透き通つたかわいい声だ。

【マシュー、やっぱ、かわいい。でも、その顔で、オネエ、言葉は、ちょっと、キモチ悪い、かも】

それに対して僕は肩で息をしながらそう言つてグッジョブポーズで微笑んだ。目がかすんで体が傾ぐ。

その時、いきなり僕の唇に何かが触れた。強引に口に押し込まれる。えつ、まさかマシューが？ キス？？ と思つた瞬間、目も覚めるような酸っぱさが広がる。

それは、

【誰がオネエだ。『じたご』た言つてないで、コレを食え！！ 死んじまうぞ】

と言いながら、真っ赤になつて怒つているマシューが手にしている
ガザの実だった。

【まだ持つてたの？】

僕は酸っぱさで口を曲げながらそう聞いた。

【ああ、一つでもいくつでも手間は変わらんだろうが】

そりやそうだろうけど、どうもこの強烈な酸っぱさは慣れない。『良薬口に苦し』とは聞くけど、『良薬口に酸っぱし』なんて反則技だ。まあ、一晩ですっかり回復してまた魔法が使えたんだから、かなりの妙薬だつてことは認める。でも、脳まで痺れる酸っぱさはどうにかしてほしい。

おかげで何とか倒れずに済んだんだけどね。

せつかくガソリンを満タンにしたんだから、一気にグランディーナまで行こうと言った僕に、マシューは、

【王都は都会だ。こんなもんどこにも隠しておく所がない。リルムの町でもそつだつたんだ、欲に駆られた連中にまた狙われるぞ。一ツ手前のガルダモで降りて歩こう】

と言った。僕はそれに対して、ため息を一つ落として、

【そして、マシューは一人で行くんですよね、違う？】

と返す。マシューの肩が図星という感じで揺れる。

【俺には……】

【大事な手紙を運ばなきゃいけないってことは解ってる……】

そして僕が言おうとしていることを聞きもしないで、

【解つてない、ビクは全然判つてない！ 僕の正体も知りもしないでのこのこ付いて行こうなんにするなー！ それに、お前にはコータロがいるだろ。コータロはコータロの考えがあるだろ？】

と怒鳴り気味に先輩に尋ねる。それに対して先輩が、

【いや、俺は別にマシューとグランディーナに行くのには異論はない。大体、この世界じゃ右も左も判りやしないしな。ってことは、

俺たちはどこに行こうが何をしようが自由つてことだ。それに王都ならひょっとして俺たちが元の世界に戻る方法を知ってる奴もいるかもしないしな。俺たちにとつても全くの無駄足じやないと思つてるんだがな。それとも、お前の方が一緒に行つてまざい理由でもあるのか?】

と聞き返すと、

【いや……まざいことなんて……ない】
と、なんだかじどうもどろで答えた。

【じゃあ、問題ないだろ。『袖擦り合いつも多生の縁』ともいって、

な、富本】

【はい!】

ニヤリと笑いながらそういう先輩に、僕が元気に返事をする。それから、先輩が少し声をひそめて、

【それにな、こいつを敵に回したら怖いぞ。本気で怒らせてあの『一億年』の魔法なんかかけられてみる。一瞬で塵だぞ】

と付け加えた。それを聞いたマシューはぎよつとして僕を見る。そして、ぼそつと

【そうだよな、魔女様を怒らせると禄なことがないよな】
と、つぶやく。次の瞬間、

【誰が魔女様だって?】

と薄笑いする僕に、二人は完全に固まった。でも、

【冗談はそれくらいにして、早く行きましょう】

と、言って一步足を出したところで僕は目の前が真っ暗になつてその場に蹲る。結局、二人に支えられて車に乗り込む始末だ。

「これじゃ、メガモンテを連発するマーティーモンと変わらない……かも。

やがて、僕らの前にグランティーナの城郭が見えてきた。お城だけではなく、町自体も堀で囲まれていて、その端には警備の兵が常駐している。マシューが言うようにのんきに車で乗り付けられる雰囲気ではない。よくよく考えてみれば、城下町にそう易々と入れるようではそれこそ問題なのだ。

僕たちは街道筋の外れに車を置いて歩き始めた。車に乗っている間に僕はマシューから口にねじ込まれたガザの実を身震いしながら完食してはいたけど、たかだか2～3時間のインターバルでは失ったダメージは回復しておらず、足下はおぼつかない。本当なら肩をかしてもうらう所だけど、マシューも先輩も背が高すぎてそういう訳にもいかず、僕は蟬みたいにマシューにしがみついて歩いた。何故マシューかと言えば、先輩にそんなことをしたら、絶対になぐられると思うから。

だけど、町に入るための跳ね橋の手前の所で、僕らに突進してきた一団があった。ちゃんとこの世界のトレンドに着替えてあるんだけどな、それでも『不審者』がバレた？

思わず三人で顔を見合わせる。そして、半ば引き気味の僕たちの前に息を切らせながらやってきた老人は、先輩の前で膝を折り、【殿下、殿下、よくぞご無事で。フローリア姫様が到着されてもお帰りにならないので、心配しましたぞ】

と臣下の礼をとった。で、殿下！？ 電化じゃなくって？
(もつとも英語じゃ全く違う単語なんだけど)

老人はポカーンとしている先輩にお構いなしに、今度は立ち上がりて僕の手を取ると、

【セルティオ卿もお役立ございました。はて、そこの御仁は……】

握手を求めながらそつと言つ。えつ、僕も誰かと間違われてるの？

その中でマシューだけがそつくりさん？　がいないらしく、老人が胡乱な表情で彼を覗き込む。それに対し、マシューが

【わ、私はガッシュタルトのマシュー・カールと言つ者です。フローリア姫に火急の文を届けに参りました】

つつかえながら老人に挨拶をした。

【なんと、ガッシュタルトのお使者であられるか。私め、このグラントディール王国の家令を仰せつかつておりますクロヴィスと申します。さあ、殿下、陛下も心配されちゃられます。一刻も早くお城へと、先輩を促す。

「お、おいここは付いて行くべきなのか？」

それで慌てた先輩がこそっと僕に耳打ちをする。

「とにかく、マシューが手紙を渡すまでは、このまま付いて行つた方が良いんじゃないですか？　でないと、マシューまで疑われて、手紙届けられなくなりそうです」

「分かつた」

僕の答えに先輩は頷いてから、クロヴィスさんに続いて、城下町に入つて行く。僕もそれに続いて歩きだしたけれど、まだ体に力が入らなくてマシューに寄りかかってゆつくりしか歩くことができない。それをクロヴィスさんに見とがめられた。

【やつ、これはセルディオ卿、いかがなされました。】

【あの、えつと、これはガス欠……いえ、ちょっと……】

ガソリン作ったから電池切れですなんて言えないしなあ。僕が答えられずにもじもじしていると、

【長旅で体調を崩されましたか。それは大変】

クロヴィスさんは勝手に体調不良と判断して（この人ホント自己完結型だよね）、一緒にいる騎士らしき人に目で合図を送る。すると、見るからに屈強な男の人が、

【失礼します】

と頭を下げる。いきなり僕をお姫様だっこして歩き始めた。

【あ、大丈夫です。僕、ちゃんと自分で歩けますから】

男が男にお姫様だつこされているというとんでもなく恥ずかしい状況に僕は真っ赤になつて抗議したが、だつこしている方の騎士は顔色一つ変えず、肃々と歩みを進めていく。

【ねえ、降ろしてつて言つてるでしょ！】

そして、なおも抗議を続ける僕に、少し前を歩いていた先輩がいきなり僕の方に向き直ると、

【そんなに気を使つな、セルディオは私を守るためにちと力を使いすぎた。ここまで戻つてきたからにはもう案ずることはないではないか。陛下の御前までは楽をさせてもらえ】

と言つた。げつ、いきなり王子なりきりですか、先輩。確かに、みんなのためにガソリン作つて力使い果たしましたけどね。そんな汚闊な発言して、もし偽物だつてバレたらどうするんですか！ 僕の顔が恐怖でひきつる。それを見た先輩はつかつかと僕の耳元まで戻つてくると、みんなに分からないように日本語で、

「こらつ、王子のフリしろつてつたのはてめえだろうが。とにかく今はなりきつて、お前の体力が回復し次第何か理由付けてばっくれりや良いんだよ。今のお前の体力じゃ到底逃げきれないからな。がんばつてそのなんたら卿になりきれ！」

と言つてから、

【本当に、私に忠誠を頼くのは良いが、自分の身も労つてくれよ】
とわざと大きな声でそう付け加えた。

【では、このように帰還が遅れたのはやはり殿下に……】
クロヴィスさんがそれを聞いて慌てて先輩に尋ねる。

【ああ、命も危うかつたが、セルディオの力で何とかな】
調子に乗つて先輩は王子の演技を続ける。それにしても、セルディオさんのキャラも知らないのに、そんなテキトーなこと言つて良い

わけ？でも、その発言に、みんながおおといふ感嘆の声が挙がり、クロヴィスさんがここにこしながら、

【殿下の危急を救われたのですか。さすがは希代の魔術師と謳われたお方。私も見込んだ甲斐があつたというもの】

と返した。良かつた。そのセルティオさんって言う人もやっぱり魔法使いらしい。顔が似るとキャラもくるんだろうか。ホツとした途端、全身から汗が噴き出す。

【陛下との謁見が終わられたら、一旦城で休んで行かれると良らしいでしよう】

あ、セルティオさんは一応お城の人じゃないんだ。

先輩さえ何とかできれば、僕は体調さえ回復したらいいを出される。僕は少しは希望を持てる展開に胸をちょっとなで下ろして、ふとマシューの方を見た。マシューの方も僕を見ていたらしく目があつたが、何とも複雑そうな顔をして目を逸らした。マシューは日本語が解らないから、先輩は本当は王子様で、騙されていたとしても思つていいのだろうか。

マシューに本当のことが説明できないまま、僕たちはグランディール城内へと入つていった。

謁見の間

城に入った僕たちにまるで卒業式みたいに両側に人の垣ができる。卒業式と違うのは彼らのほぼ全員が男性で、拍手の代わりに臣下の礼をとっている所だろう。

人の波を進んで、広い部屋（謁見の間）に入ると、僕はやつと床に降ろしてもらえた。そしたら、マシューがさりげなく、僕に脇（肩じゃないのが本当に悲しいけど）貸してくれた。王様に謁見するのに座つたりはできないもんね。

すると、王様が謁見の間につく前に、一人の女性が入ってきた。彼女はまっすぐ先輩のところに来て、

【コーテル様ご無事で何よりです。本当にわたくし、心配いたしました。良かった】

と言った。王子様の名前つてコーテルなの？ 僕はびっくりする反面、マシューが幸太郎という名前をコーテルと言つたことに納得した。こっちではコーテルという名前が結構あるのかもしれない。

だけど、その女性を見てまたびっくりする。

「か、薰！」

先輩が思わず素つ頓狂な声を上げた。だって、そこにいたのは総務の谷山先輩のそつくりさんだつたからだ。

谷山先輩というのは、総務の女子社員で、先輩と売り上げの伝票のことなんかでつば迫り合い繰り返している、先輩とは犬猿の仲つて感じの人だ。確か、谷山先輩のお祖母ちゃんがイギリス人で、どうなく日本人離れした顔（先輩はそれを『人間離れした顔』なんて茶化すけど）だから、この外人っぽい異世界集団にいても、僕らよりもっと違和感ないんだけれども。

そのとき、谷山先輩もどきの体が傾いだ。先輩がとっさに彼女の肩を抱いて支える。

【フローリア姫様、大丈夫ですか】

それを見てお付きの侍女が慌てて彼女に近づいたが、先輩はそれをやんわりと制して、そのまま彼女を抱いたままでいた。そうか、谷山先輩もどきが、ガッシュタルトからきたフローリア姫なんだ。状況から考えると彼女はコーラル王子の婚約者みたいだから、ふらつく婚約者をさっさと侍女に預けちゃうのはまずいもんね。

【姫様は殿下が消息を絶たれてからほどんど眠つておられませんでしたから】

侍女がそう補足する。

【だつて、わたくしコーラル様ともう会えなくなつてしまつのではないかと不安で……】

【もう心配しなくて良い。私はこうして無事だ】

それを聞いた先輩は、そう言つて彼女の頭を撫で始めた。そんな先輩の顔を横目で見ると、先輩はものすごく照れくさそうで嬉しそうな顔をしている。その顔はとても演技だとは思えない。もしかして先輩、本当は谷山先輩のこと好きだったの？ いつもケンカばかりしているけど、よくよく考えてみればじやれあつていたような……

「そつかあ」

僕がぷつと吹き出してそう言つと、

「宮本、何を変な妄想してる」

と、先輩は横目で僕をにらんだ。僕は、

「何にも。あ、お姫様の手前、あまり日本語でしゃべらない方が良いですよ」

と返した。

そのことで改めて僕の存在を思い出したみたいの（ホント、2人の世界だつたもんねえ）お姫様、

【セルディオ卿も、今度は誠にご苦労さまでした。あら、そちらの方は……】

とマシューを覗き込む。手紙を届けなきやならないご本人登場で、しかもかなりの美人だから緊張しているのかもしれないけど、マシューは目を泳がせて明後日の方向を見る。

【ほらマシュー、ガッシュタルトからの手紙渡さなきや。本人が出てきたからって固まつてどうすんのさ】

貸して貰っている脇を突つきながら、僕はそう言った。日本語が通じるんだつたら、彼の名誉のために日本語で囁いてあげたい位だ。

【手紙ですか？　お父様かお母様に何か？】

僕の発言を聞いてフローリア姫がものすごく不安そうな顔になる。そりやそうだろ、婚約者がやつと戻ってきたと思つたら、今度は親が……なんてことになれば、マジで倒れるかもしれない。でも、マシューは手紙を取り出すどころか、ますます明後日の方を向く。それを見たお姫様は、何かを気づいた顔になり、

【まああなた、なんて格甲をしているの？　正体をあらわしなさい！】

と、マシューに向かつて一喝したのだった。

マシュー！　君つてば何？　実はラスボスだったとか言わないでよね。

フローリア姫に一喝されたマシューは唇をかみしめて立ち廻りして、いたが、姫様が

【エリーサ！ 分かつているのよ】

と言つと、マシューははつと大きなため息を吐いた後、それこそしゅるしゅるという擬音が聞こえてきそうな勢いで、どんどんと縮んでいき、あつと言づ間に子供の姿になつた。それは、僕がガザの実を初めて食べたときに見たあの少女だつた。ガザ実を食べる」とで、一時的に魔力が上がり、マシュー（エリーサちゃんと言づべきなのかな）のかけている魔法を見破つていたのだろう。でも、僕は経験値が限りなくゼロに近かつたから、一瞬だつたんだろうな。

それに、日本語と違つて英語は言葉尻で性別を特定するのは難しいし、僕にとつては外国語だからマシューの体格で低音の聲音で話されたら、僕の頭は無意識のうちにそれを男言葉として認識していた。だから、マシューのことを本当は女の子だつたなんて微塵も思わなかつたのだ。

【お姉ちゃん、なんで分かつちやつたの？】

エリーサちゃんは、フローリア姫にふくれつづらでそつ尋ねた。

【分からぬい訳がないでしょ、あなたが家出したつてことはひとつくにソルグが知らせてきてるし。あなたがお城を出て、向かうとしたら、私の所しかいだらうつて、おじいさまもね】

【そう、バレてたの……それにしてもあのバカ鳥、速すぎるよ】
フローリア姫の答えに、エリーサちゃんが舌打ちをする。

【あら、あなたが遅すぎるのよ。大体、空を突つ切つて飛んでくる鳥に、徒步のあなたが勝てるわけないじやない。途中からは、コータル様たちの馬にでも乗せてもらえたの？ 先触れの者からは、あなたたちが歩いていたと聞いたけれど】

ソルグというのは、伝書鳩みたいなもんなんだろうか。鳥だと、

届けるのは不幸の手紙みたいな気はするけどね。

それはともかく、この世界の魔法使いが簞に乗つて空が飛べるかどうか僕は知らないけれど、あの魔道書にも、空を飛ぶ項目はなかったし、飛ぶ魔法とかはないかもしない。

と言つことは、この幼い少女はなりを大人にえていたとしても、たつた一人で車で何時間もかかる道程を行こうとしていたつてことだ。

パシンッ、次の瞬間、広い謁見の間に平手打ちをする音が響く。いや、正確に言えば響かせる。僕が、エリーサちゃんの頬を打つたのだ。

「なつ、富本！」

【ビク！！】

フローリア姫をお姉ちやまと呼ぶのだから、エリーサちゃんは間違いないく隣国のお姫様。国際問題に発展しかねないその状況に、周りは一気に青ざめた。だけど、僕は怯まずに、

【エリーサ様、あなたは何という無茶をなさるんですか。魔法で大人のフリをしたからと言つて、それはあくまでもフリでしかないんですね。あのときもたまたま殿下と私が通りかかったからよかつたものの、そうでなかつたらどうなつていしたことでしょう。そうなつたときに、お悲しみになる陛下やお后様のことを考えなかつたんですけど！】

と言つた。

【だつて……】

【だつてじゃないです。知り合つて3日と経たないこの僕が、それを知つたらこんなに苦しいんですよ。何もなくて本当によかつた】僕はそう言いながらエリーサちゃんの頬を撫でた。すると、エリーサちゃんは泣きながら僕にしがみついてくる。やつところで立つている僕はちょっとよろけたけど、何とか踏ん張つて、彼女を抱きしめた。その様子に、安堵のため息がそこかしこからもれてくる。

【お、おほん、そろそろ陛下が参られます。お控えください】

その時、奥の方から出てきた人が僕たちをちらりと横目で見てそう言った。僕は慌ててエリーサちゃんの身体を離し、臣下の礼をとつて、王様を待った。

しばらくして奥の扉が全開になり、王様が徐に大臣やらお付きのものを大勢引き連れて現れて玉座に着いた。人々は概ね遅ればせながらの王子の「ご帰還に喜びと安堵の表情を浮かべている。でも、若干名そうじやない者もいるようだ。特に大臣らしき小太りの中年のおっさんは、顔こそ笑つてはいるが、目が笑つてはあらず、なんとなく心の中で舌打ちしているのが聞こえてきそうな気がした。

【コーラル、ようやく帰つて参つたか。あまりに遅いので、無法者に襲われて命を落としたという者まで現れてな、心配したぞ。いくらこちらでの挙式がまだだからとは言え、セルディオとたつた2人でなく、姫の馬車と同行する形で帰つても良かつたのではないか?】王様は先輩にそう言つた。やつぱりフローリア姫は王子の婚約者だつたんだ。王様の言つてることを考えると、一応、ガッシュタルトでの結婚式は終わつてゐるみたいだけど。

【いいえ、今度のことは私が不注意だつただけのこと。そのためにはセルディオを大変な目に遭わせてしました】

王様の労いの言葉に、先輩がさつきのクロヴィスさんへの発言とも辯證を合わせるように報告する。

【そうだ、セルディオ、コーラルの命を救つてくれたのだとな。このバルド、高い壇上からではあるが、心から礼を言つぞ】

【とんでもない。私は殿下に仕えるものとして、当然の責務を果たしたまでのこと。そのようなお言葉、もつたいのうござります】王様の感謝の言葉に、僕は低くしている姿勢をなお低くしてそう答えた。というより、一旦膝をついてしまつたら、もう元に戻せなくなつてゐるものある。ホントのところをこうと、僕の額にはつつすらと脂汗が浮かんでゐる。

【して、その美しい少女は?】

続いて、王様は僕の横でそんな僕の様子を心配げに頭を下げている
マシュー改めエリーサちゃんに眼を向けた。

【ガッシュタルト王女、エリーサ様にございます】

僕の紹介にエリーサちゃんは、王様にお辞儀をした。その仕草はとても優雅で美しい。こんなにちゃんとしつけられている彼女がある大男マシューと同一人物だったなんて信じられない。

【ごめんなさい、お姉ちゃんのご成婚がどうしても見たくて、ノーダル様を追いかけて、強引に付いてきました】

ここにいる理由をそう言つたエリーサちゃんに、

【そりゃ、やはり小さくても女性は女性ということか。姫の婚儀をそれほどまでに見たかったか】

と、目を細める王様。でも、結婚式を見るために男になりますまで、たぶん、200km近い距離は歩かんでしょう、普通。本当は違う理由があるんだろうけど、そこは今聞けないし、これは乗つた方が良い。

【謝るのは私の方です。遅れた分、一刻も早く城に戻りうと、あなたを先にお送りせずに、連れ歩いてしまいました。その上、リルムの町では危ない目に遭わせてしましたし、そんな私をあなたはわざわざガザの実を取りに行ってまで看病してくださったじゃないですか】

と、熱くエリーサちゃんを見る。

【殿下と姫様のご婚儀が終わり次第、ちゃんとガッシュタルトまで私がお送りしますからね】

【セルディオ様】

エリーサちゃんがうるさいの眼で僕を見つめた。これで、僕はこの城を出られる。先輩は……このままグランディールの王子様になつてもらおう。

たぶん、僕の推測では王子様とセルディオさんはもうこの世にはいない。もしいたら、今頃きっとお城に帰つて来れなくとも何らかの連絡はしているはずだ。それがなつてことは……そう言つこと

なんだと思う。

【それでは、婚儀は明後日に執り行う。國中に触れを出せ】
一通り話を終えた後、王様は高らかに結婚式の日程を宣言した。しかし、その時、慌てて

【王よ、お待ちください。騙されではなりませんぞ。こちつらは、
殿_{だい}下とセルディオ卿を騙る偽物でござります】

そう進言したのは、一人眼の笑つていなかつた小太りのおっさんだ
つた。

ラスボス登場……なのか？

【テオブロ、いい加減なことを言うでないぞ】

小太りのおっさん改めテオブロ（胡散臭いので、敬称略！）は眉にしわを寄せてそう言う王様に、胸を張つてこう言った。

【いい加減ではございません。よくご覧ください、殿下の髪や肌はもつと淡かつたはず、セルディオはこれほど小さくはなかつたと思ひますぞ。

それに、こやつは殿下が襲われたのがリルムの町だと言つております。したが、私がその報を聞いたのはトレントの森。話が違います】

大臣クラスの自信満々の発言に、騎士たちがさつと身構える。
確かに先輩はちょっと染めていて真つ黒ではないけれど、それはあくまでも日本のビジネスライフにひつかからない程度の茶色だ。肌はこの色が生まれつきなんだから仕方ない。……にしても、どーせ僕はチビですよ！ 改めて言つことないじゃないですか！－でも、これで僕はこのテオブロって奴が王子とセルディオさんを襲つた真犯人だとわかった。

【ふうーん、テオブロさん、王子たちが襲われたのはトレントの森だつた訳ね】

【そうだ、リルムの町ではないわ。トレントの森奥で殿下らしき者が魔物に切り裂かれていたと報告が……】

【なにつ、確かに、トレントの森と言えば街道沿いを行くよりは近道で、あの在のセルディオとなれば行つても不思議はなかろうが、わしはその様な報告は聞いておらんぞ！】

テオブロの言葉に王様の声が裏返る。へえ、セルディオさんつてお城に住んでないとは聞いていたけど、森に住んでるんだ。いかにも魔法使いつぽい。

【へえ、王様も知らないことを知つてるんだ、テオブロさんつてば

【何が言いたい！ わしは余計なことを耳に入れて王に心配をかけ

まことだな……】

【ふふふ、確かに僕たちは本物の王子と魔法使いじゃない、日本つて国から飛ばされてきた、なんてことない異世界人ですよ】
ちょっとぴり歯切れの悪いテオブロの答えに、僕は軽く笑いながらそう返す。

【び、ビク！】

「富本、自分で言つてどうする…」

その答えに、エリーサちゃんも先輩も一瞬で青ざめた。

【ほほう、取り繕つてもボロが出ると解つてあつさり認めおつたか。この偽王子たちをひとつ捕らえよーー】

テオブロはしてやつたりという表情で騎士たちにそう命じた。だけど、それがウソだつたら、とんでもない不敬罪だし、本物のセルディオさんは『希代の魔法使い』と呼ばれるくらいの人だから、何か術を仕掛けてくるんじゃないかと思つて騎士たちはゆっくりしか近づけない。

【何をしてある、早く捕らえぬか！】

【ちょっと待つてくださいよ。確かに僕たちは本物ではないから、王子様たちが襲われた状況は全く知らないです。

でも、あなたは僕たちが偽物だつて最初から判つていた。どうしてですか？ 本物の王子様はもうこの世にいないと知つてる、そういうことですよね】

【な、何が言いたい！】

【あなたが王子様がいないと断言できるのは、あなたが……いえ、あなたが直接手をくだしたのでは勿論ないでしょうが、あなたの手の者が王子様たちを闇に葬つた、そういうことなんじゃないですか？】

そして僕は……

僕の爆弾発言に謁見の間の空気が一瞬固まる。

【えい、ええい、何を言つたかと思えば！ 王子になりますことがありますかなわぬと知れば、今度はわしを犯人扱いにするなど、言語道断。わしを王弟テオブロと知つての狼藉か！】

テオブロ一人が沸騰した薬缶みたいになつてがなり散らすけど、騎士はぴくりとも動かない。そつか……テオブロは王様の弟な訳ね。じやあ、王子がコーネル様一人なら、それで次の王様は自分のモノつて訳だ。充分な動機あり過ぎで、僕と彼の言つことのどちらが眞実か量りかねているのだろうし、騎士は基本的に王様に従つもの。テオブロは王様じやないもんね。

【な、何をしておる。この大悪人を早く捕らえぬか！】

【テオブロよ……お前よもやコーネルを手に掛けたとは言つまいな

その時、王様が沈痛な面もちでテオブロにそう言つた。

【王よ、王はこの血を分けた弟の言つことより、素性も分からぬ輩の言つことを信じるおつもりですか！】

【わしとて信じどはなはいが、かねがねあまり良くない噂も聞いてあるのだぞ】

【……】

王子様の暗殺計画は今回に始まつたことじやないらしい。テオブロは、王様にそう言われて、拳を握りしめ、唇をかんで黙つていたけど、

【なぜじや、なぜわしの言つことを聞かん。もういい、ならばわしがこの大罪人を成敗してやる！】

と、逆上し、先輩にいきなり切りかかった。ダメだ、王子様だけじゃなくつて、先輩まで殺される！ 僕は、やっぱり自分のスキルなんて一切無視して、テオブロと先輩の間に割り込んで……

僕はテオブロに、あつさりぱつぱり切られた。スローモーションで視界が横に流れしていく。その時に床に飛び散った血が見えて、意外と血つてよく飛ぶもんだなと思う。

切られたところは痛いと言うより熱かつた。それに、心臓がふたつになつたみたいに、切れたところから動悸を打つ。それくらい血が流れているんだろうか。一旦、床に転がつてしまつと、頭を上げることすらできなかつた。

その後、なおも先輩を切り下とするテオブロは、王様が騎士に取り押せえるよつ命じて、あつと言つ間に取り押せられた。テオブロが、

【なぜわしがこのよつな仕打ちをされねばならん。罪人はこやつらじゃ！ 離せ、離せぬか！】

と、大声で叫びながら暴れるのを数人ががりで抑えて謁見の間の外に連れ出されていくのが見えた。

「富本、しつかりしろ！」

騒動が収まつたあと、先輩が慌てて僕を抱き起こす。すると、僕の目に、超どアップのエリーサちゃんの泣き顔が飛び込んできた。

【エリーサちゃん、せつかくの、ドレス、汚れちゃうよ】

僕はそう言つて、彼女の頬の涙を掬つた。

【ビク！ ドレスなんてどうでも良いよ。ねえ、あたし お父様の言つ通り、ビクのお嫁さんになる。だからお願ひ、死なないで！】

? なんでお父様の言つ通りにするとどうしてエリーサちゃんが僕と結婚しなきやなんないのか、その辺が全く分からない。でも、切れすぐはとっても熱かつた身体は、ずいぶんと血が抜けてしまつたのだろうか、今度は急激な寒さがやつてきて、ふるえで口が上手く動かくなつてきはじめた。

【なに？ お嫁さん】

ところのがやつとで、それもものすごく小さく声しか出なかつた。

【ミシヤシシャ、ミシヤシシャ……】

すると、ヒリーサちゃんは懸命に美久と発音しようとした。それを聞いて先輩が、

【一度に言おうとするとき発音できないんだから、区切ればいい。ミシ、ヒサ。ああ、言つていいんだ】

と助け船を出す。

【ミシシ、ヒサ……ミシシ、ヒサ】

ヒリーサちゃんは一文字ずつ区切つて僕の名を呼ぶ。でも、ミシシーなんていつたら長い舌で卵を飲み込まなきやならなくなりそうなんだけどなんて、つつこみを脳内ではいれつつ、それでもかわいいから許すと僕は思つていた。

【な……】

【好きだから、大好きだから……しないで、お願ひずっとあたしのそばにいて……】

実は僕も君が好きだよ。君がいかついおつさんときから、たぶん。自分が同じ男に惹かれる意味が解らなくて戸惑つてしまつたりもしたけれど、きっと僕はマシューの中にちゃんと君を見つけていたんだと思うよ。

だけど、僕はその想いを彼女に伝えることはできなかつた。『I love you』と言つた言葉は、荒い自分の息に書き消されて、そして……僕の意識は深い闇の中へと沈んでいった。

い、生きてるっ…！

僕は、闇の中でセルディオさんに会った。闇の中なのに、セルディオさんだけが、ぽかっと浮かび上がっていた。

そして、確かによく似てはいたけれど、魔道士が着るよつなローブを纏つた彼は、僕より数段落ち着いて見えた。

「美久、巻き込んだ上に痛い思いまでさせてしまって、どうもすいませんでした」

僕は彼が日本語で語りかけてきたので、驚いた。ああ、でも、ここは天国なんだろうから（いや、真つ暗だし、もしかしたら地獄？）悪いことはしないつもりなんだけど（そんなのもアリなのかなと思う。僕は、

「セルディオさん、あなた方の仇はとりましたよ」

と言った。そしたら、セルディオさんは、くつくつくと笑うと、「仇ですか、じゃあ、そう言つことにしておきましょうか。では、

私はこの辺で

と言つてボワーンと消えた。なんかどこまでも魔法使いっぽい人……

そして、僕はその途端、闇の中からいきなり光の中に放り出された。あまりの眩しさに、一旦目を開けたもののまた閉じなきやならないほど。そして、次の瞬間お腹に強烈な痛みが襲ってきた。テオブロに切られたところだ。生きている、僕まだ生きているんだ！！僕が再度目を開けると、そこは謁見の間ではなく、白い壁に囲まれた、小さな部屋だった。僕はベッドに寝かされていて、隣のベッドには先輩が。その手をフローリア姫が心配気に握っている。テオブロはもう捕まつたはずなのに、どうして先輩までベッドに寝かされているんだ？！

「せん……ぱい……せん」

僕が先輩を呼ぶと、フローリア姫は弾かれたよつこ、僕の方を見て、「富本君、気が付いたの…！」

と日本語で言つた。あ、じゃあ、この人はフローリア姫じゃなくつて、谷山先輩？ そう思つて、先輩の方をもう一度見ると、先輩には、あつちではお目にかかれそうもない管やら機械に囲まれている。ああ、ここは日本だ。僕たち、戻れたんだ。そう思つたら痛みは尚更現実化してきて、たまらずに、

「ううう」

と僕は呻き声を漏らした。その声を聞いて、

「痛いの？」

と尋ねる谷山先輩への返事の代わりに、僕は切られた所を庇うように身をすぐめた。その様子を見て彼女があわててナースコールを押す。

程なく、病室に看護師がやってきて、僕の着ていた布団をひつペがすと、

「大変だわ！」

と叫んでだだだとまた慌ただしく病室を飛び出していった。それからしばらくして、その看護師は他の看護師やら医師やらを引き連れてどやどやと戻つて来た。

「大変だ、しかし、何で今更縫合部分が外れたのか。とにかく、緊急手術の用意！－！」

僕を見た医師が、首を傾げながらそう言つ。縫合部分？ 僕はこっちの世界でも怪我をしてたのか。痛みでぼんやりとしてきた頭でどう思った僕は、こっちの世界に戻ってきたばかりだというのに、またすぐ麻酔で眠らされてしまった。

僕は眠りそれでも、さっきまでの世界に行くことはなかった。どうでも良いような取り留めのない、ホントに夢らしこ夢を何個か続けて見てまた目覚めた。その時、

「お兄ちゃん、大丈夫？」

と僕の顔をのぞき込んだのは……なんとエリーサちゃんだった。彼女を見て、あ、僕はまた異世界に戻ってきてしまったんだと思つて嬉しくなってしまった。現実逃避といわれても仕方ないかな。

「お兄ちゃん、本当にいめんね」

枕元で、エリーサちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「エリーサちゃんがどうして謝らなきやならないの？」

そうだ、エリーサちゃんが謝る必要なんてない。本当は大男に変身できる位の魔女だった訳だから、もしかして魔法を駆使して僕を強引に呼び戻しでもしたとか？　でも、彼女から帰ってきた答えは僕の予想とは全く違つていた。

「英梨紗が道路に飛び出したから」

「道端に飛び出した？　エリーサちゃんが？」

グランディーナのジコの道端に飛び出したからって、どうして僕に叱られなきやならないと思つんだわ。あ、隣国まで家出したことで、平手打ちにしちゃつたんだっけ、僕。あれが、トラウマにでもなつてゐる？

「うん、なんか違う。そつきから彼女はエリーサじゃなく、エリサって言つてるし、僕をビクじやなくお兄ちゃんと呼んでいる。それに、よくよく考えれば（よくよく考えてみなくとも）彼女がしゃべつてるのは紛れもない日本語。僕や先輩や谷山先輩のそつくりさんのがいたように、エリーサちゃんのそつくりさんもいたって訳か。もっとも、僕の側から言えばエリーサちゃんのそつくりさんがエリー サちゃんといふのが、正しにのだらうけれど。

あの日僕たちは、アウトドアでの調理器具を展示するために、幕張に行く予定だった。先輩がセリカちゃんに乗らなかつたのは、何のことはない、見知つた道だつたからで、そもそも迷子にもなつてなんかない。

で、真相は、会社近くの道路に飛び出してしまつたエリサちゃんを避けようとして先輩がハンドルを切り損ね、ガードレールに激突した、そういうこと。

しかも間の悪いことに、僕たちはあの時、ロイヤリティーのチッカマンを大量に乗せていた。事故後そのチッカマンに引火し車は大破。僕たちは瀕死の重傷だつたといつ。

「エリサちゃんはどこも怪我していないの？」

「うん」

「なら、良かった。謝ることなんて何もないよ。僕は君が無事でいてくれればそれで充分だよ」

僕はそう言つて、エリサちゃんの柔らかくて細い髪を撫でた。エリサちゃんの頬がぽあつと薔薇色に染まる。

「でも、どうして、お兄ちゃんは英梨紗の名前を知つてゐるの？ 最初変なとこ伸びてたけどさ」

そして、不思議そうにエリサちゃんはそう聞いた。

「うん？ 何でかな、エリサちゃんの夢を見てた。君が僕をここに連れて帰つてくれたんだよ」

「ひえ？？」

当然だけど、エリサちゃんは意味が全く解らないだろう。でも、僕はこの展開に運命すら感じているんだけどね。夢の中で言えなかつた『I love you』をきっとと言えると確信したから。

「僕のことは、夢の中みたいにビクつて呼んでくれる？」

そう言つた僕の言葉に、エリサちゃんは薔薇色を通り越して、茹で蛸になりながら、ブンブンと首を縦に振つた。

僕の耳に、相変わらず眠つたままの先輩が夢の中で言つた、『お前、しまいに押し倒されつぞ』の言葉が聞こえた気がした。

先輩、僕このままじゃ押し倒される前に、押し倒しちゃうですけど。
それって、犯罪……ですよね。

僕の傷は順調に回復していった。先輩も傷は大分良くなつていて、もう命の心配はないという。だけど、先輩は僕が目覚めても一向に目覚める気配がなかつた。

とんでもない大事故だつたにも関わらず、僕にも先輩にも脳に損傷はないという。なのに目覚めることがない先輩……僕はある一つの思いにどんどんと心が苛まれるようになつていった。

僕たちがいたあの世界はもしかしたら僕の夢の世界なのではないだろうか。そして、本来なら先に先輩がテオブロに切られてこちらの世界に戻り、それから僕が戻る。あるいは、僕が本当はもうこっちの世界には戻ることができなかつたのかも。

だけど、僕は先輩を押し退けてテオブロに切られた。そのために先輩をあつちの世界に閉じこめてしまつたんじゃないのかと。

長い間眠つたままの先輩の肌は抜けるように白くなり、少し痩せてしまつていて。でも、まだちゃんと生きていることを主張するかのように髪が少しずつ伸びる。その髪をまるで壊れものを扱うように優しく丁寧に剃る谷山先輩を見ていると、僕は胸が詰まりそうだった。先輩、こんな戦闘不能の状態から早く抜け出してきてくださいよ。マシュー曰く、先輩は勇者様なんでしょう？

先輩の髪を剃り終わつた後、谷山先輩がぽつりと、「富本君、どうしたら鮎川は目を覚ますんだろうね」と言つた。

僕はRPGの戦闘不能なら、死者蘇生の呪文を唱えればそれで良いのになと思つた。実はあの魔道書を最初に見た時、ゲーマーの僕はそこを真つ先にチェックしていて、その詠唱文言もちゃんと覚えていた。だけど、現実世界でそれが効くとは思えないし、死者蘇生の魔法は、ランク的に最上級に属するはずだから、よしんば僕にまだ魔力が残つていたとしても、全然MP不足だらう。でも、あつち

の世界では超初心者の僕が結構、ぼんぽんと上級魔法唱えていた。後で、ぶつ倒れるおまけ付きだけど。それでも、唱えてみるだけの価値はある？

もし効いたらガザの実のないこの世界では、僕の方が今度は寝たきりになってしまつかもしない。ちょっとそんな考えが頭を過ぎつて、僕はかすかに震えながら谷山先輩に、

「谷山先輩、僕ね、眠っている間すつごくチートな魔法使いだったんですよ。案外死者蘇生の魔法を唱えたら、復活したりして」とわざとおどけてそう言った。

「ふふっ、なにそれ。チープなコミックスジゃあるまいし」

案の定先輩はそう言って笑った。

「でも、やってみる価値はありますよね。何もやらないよりは良い」僕はそう言って、やつとくつこいたばかりのテオブロに切られた傷を底いながら立ち上がり、背筋をピンとのばすと、

〈黄泉の世界を統べるものよ、我の声に応えてこの者の魂を現し世に呼び戻せ、Rise dead〉
と高らかに詠唱した。

先輩の頬が上気したような気がした。でもそれだけで、先輩はやっぱり目を覚まさない。当然と言えば当然だけど、魔法なんてありはしないのだから。

「ヤダ、それもしかしてラテン語？ イヤに本格的じゃない」

谷山先輩が目を丸くした後、バカ笑いする。ひとしきり笑った後、小声でありがとうと言つて、

「じゃあ、お姫様がキスでもしたら、田覚めるのかしら。眠り姫ならぬ、眠り王子は」

と、言つた。彼女は全くの冗談のつもりだつたんだろうけど、僕が「それ、アリかもしませんよ。僕の夢の中では谷山先輩はお姫様で、先輩は王子様だつたんです」

と、マジ顔で返すもんだから、ちょっとびり引き気味だつたけど、

「じゃあ、やつてみよっか。せらなりよりはマシかもね」

と、笑うと、照れながら先輩に顔を近づける。そして、二人の口び
るが重なったとき……

窓も扉も全く開いていない病室に一陣の風が吹いた。驚いて、窓
を確認した僕の耳に、

【つ……ん、フローリア愛してる】

と言つ先輩の声が聞こえる。ギョッとして先輩の方をみると、先輩
はがしつと谷山先輩を腕の中に閉じこめて、キスをしている。谷山
先輩が突然の事態にあたふたしていた。

唇が離れたあと、谷山先輩に、

「あ、鮎川っ！ いきなり舌を入れてくるなんて、どうこう了見？
ホントはいつから意識があつたの？ このエロ親父！！」
と言われてグーで殴られたことは言つまでもない。

「フローリア」

「はい？」

先輩がお姫様を呼ぶ声に、谷山先輩は疑問形で語尾を若干上げて応える。

【フローリアってなんだ】

先輩は今度は英語でそう聞く。

「だから何だつてのよ」

谷山先輩はそれに対しても若干ウザ^ザ気にそつ返す。

「お前薰だろ、何返事してんだよつ！」

「鮎川こそ何言つてんのよ、フローリアは私の英名ー。薰は日本名！…」

「は？ 英名とか日本名とかセレブなこと言つてんじやねえよ、薰のくせに。お前、ばーちゃんがイギリス人なだけだろ」「

「イギリス人だからよ。私ね、教会で幼児洗礼受けてるの。フローリアはその洗礼名なの！ だけど鮎川がなんでその名前を知つてんの？」

「俺の夢の中に出てきたお前にそつくりな女がその名前だったんだよ」

谷山先輩の思わず発言に、先輩は舌打ちをしながらそつ答えた。えつ、じやあ……

「もしかして、先輩も僕と同じ夢を見てたんですか？」

「僕と同じ夢つて……お前、王都グランディーナとか言つとこに行つたか？」

やつぱり、先輩もグランディーナにいたの？

「はい、車^ごとおつこちちやいましたよね」「

「スライム食つたか？ しかも俺の分まで」

「はい。でも、ちゃんとスライムプリンつて言つてくださいよ。な

んかそれじゃ僕がスライムのおどり食いをしたみたいじゃないですか

か

「似たようなもんだ。じゃあ、マシュー・カールは？」

「はいっ！エリーサちゃんですよね」

やつぱり、僕たちは同じ異世界にいたんだ！

「俺と同じ夢見てたってのか？」

首を傾げながら先輩がそう言つ。

「そうです。一人で同じ夢みてたんですよ！」

「信じらんねえ。まあ、そこまで一緒なんなら、同じ夢だったのか
もな」

そして、先輩は半信半疑ながらそのことを認めた。

「そうですよ。僕が目を覚ましても先輩ずっと目を覚まさないし、
もしかしたら同じ夢の中に入いるのかもって、戦闘不能を治す呪文唱
えたんですけど、それでも起きてこないし、途方に暮れてたんです。
そしたら、谷山先輩が『王子ならお姫様のキスで目覚めるんじゃな
いか』って。いやあ、ホントにお姫様のキスが効くとは思いません
でした」

でも、先輩の生還劇を喜々として話す僕に先輩は、

「余計なことしゃがつて」

と言つた。

「は？」

「お前が余計なことしなきや、今頃はその夢の世界で、お姫様と甘
い新婚生活の真っ最中だつたんだ。何が悲しくてこの凶暴女のキス
で戻らなきやなんねえんだ」

「何ですつて…！ 富本君、あんたまだ魔法使える？ お姫様とし
て命じるわ、こいつを瞬殺して」

先輩の凶暴女の発言に谷山先輩は思わず暗殺（あ、大っぴらに殺す
のは暗殺とは言わないのか）命令を僕に下した。

「しゅ、瞬殺つて、物騒な。でも、谷山先輩すぐ心配してたんで
すよ。それなのに、そんな言い方するなんて。海より深く反省して

ください」

と、言いながら僕は手を前に繰り出す。

「お、おい何の呪文をかけるつもりだ。富本？　まさか、あの『一億年』とか言わないでくれよ。ホント、『ゴメンあやまるからや』、その動作に、先輩は完全に怯えきっている。あれは夢の中のことだ、僕が現実世界で魔法が使えるはずもないのに。でも、事故からの谷山先輩の気持ちを考えると、ちょっとお灸をすえないとねと僕も思つたし、かつこうだけしてみる。

だけど、手を振り上げた途端、僕にまたあの上級魔法を使つた後のような激しいめまいがして、僕は

「なーんちゃつてね」

と言いながら意識を失つたのだった。

意識を回復した先輩は、まるで怪我なんかしてなかつたかのようにバカみたいに元気になつた。一方、僕の方は意識を失つた後原因不明の高熱が出て、点滴生活に逆戻り。

「急変するのはよくあることだが」

と言いながらも、どこか腑に落ちないという表情で担当の医師は僕を見た。

結局、退院は先輩の方が先で、僕はその3日後。その週いっぽい自宅療養して（一人暮らしの僕はというより、居なかつた分ほこりのたまつた部屋の掃除とか、たまつた洗濯をするとか、事後処理に明け暮れていたのだけど）、週明けにお久しぶりの出社をした。正直入社して半年そこいらで事故で長欠した僕の席がまだあるのか不安だった。

深呼吸して、営業部のドアを開く。

「おはようございまーす」

「お、富本、やつと元気になつたみたいだな」

声をかけてくれたのは、兵藤さん。

「はい、おかげさまで。本当に長く聞こ迷惑おかけしました」

そう言いながら、僕がデスクにつこうとするところ……

「富本、そこもつお前の席じゃないぞ」

と、兵藤さんが言つた。や、やっぱりもう僕の席はどこにもないの！ 不安が的中して頭が真っ白になつてしまつた僕に兵藤さんは笑いながら、

「お前、掲示板ちゃんと見たか？ 辞令が降りてんだよ、配置換え。わかつたらさつと見て、新しい部署に出社しろ。早く行かないとい、

大目玉くらうぞ」

と言つた。は、配置換え？ はあ、辞めなくて済んだのは良かつたけど、それでも窓際行きかあ。僕はのろのろと掲示板を見に行って、

そこににかかれてある辞令に……

マジでひつくり返った。そこには、

宮本美久

上記の者平成 年 月 日付けで秘書課勤務とする。

以上

と書かれてあつたからだ。秘書課あ？ この僕が？？ 何かの間違いでしょ！

だけど、いつまでも呆けてはいられないし、僕はとりあえず今度は秘書課のドアを叩いた。

「どうぞ」

と言われて中にはいると、そこにはなんと先輩がいた。

「先輩！」

「遅いぞ宮本。社長より遅れできたら洒落になんねえんだからな」先輩はそう言つて僕にデコピンを食らわせた。

「なんか悪い冗談なんですかね、秘書課なんて」

「ああ、そう思いたいよ。お前はなんかまだ良いぞ。俺なんか頃合い見て取締役会に出席のおまけ付きだぞ」

取締役会？ 完全に予想外のワード連発に頭がついていかない。

先輩はため息を落として、

「俺さ、お前が倒れた後薫にその……プロポーズしたんだわ。んで、退院した日に薫の親に挨拶に行つてさあ、そしたらこうなつた」と言つた。まあ、夢の中에서도奥さんにするくらいだから、本気で惚れることを自覚してちゃんと向き合つたんだろうけど、それがどうして取締役会やら僕まで秘書課勤務になるんだろう。

「へっ？」

「薫、この会社の会長の孫。正真正銘のお姫様」

「げつ。でも、それじゃなんで僕まで秘書課なんですか」

「あれ、気づいてねえのか？ 薫とあの子、英梨紗はこいつの世界でも、姉と妹なんだよ。お前、あの子口説いだる。薰と俺が結婚するって言つたら、あの子もおまえと結婚するんだって駄々こねてさ、ほんじやま様子見つて」と社長のそばに置くつて事になつたわけ

「はあ」

その言葉に今度は僕からため息が出た。

「ま、英語も呪文も使いこなす『語学マスター』なんだから、案外おまえつて、向いてんじやねえの、この仕事」

向いてる向いてないは解んないけど、エリサちゃんと再会したとき、運命を感じた僕の予感は当たつていたのだろ? それが良い運命なのかどうかは別として……

谷山先輩とエリサちゃんは本当は姉妹ではなく、会長の長女の娘の谷山先輩と、最初の奥さんが亡くなつた後、30歳年下の奥さんと再婚した会長の娘のエリサちゃんは実は姪と叔母の関係であることが分かるのは、また後日の話。

道の先には…… Happy endが転がつていた。なーんてねつ!!

— The End —

道の先は……（後書き）

以上をもちまして、本編終了となります。

あとは、あの性格の悪い魔法使いの視点のみ。本編だけではちょっと不完全燃焼だったところも、これで完璧に分かる……はず。

よろしけつたら続きを読をお付き合このせびを。

アンデッドマン、登場

僕たちが現実に戻つてきてたつた一つ氣にかかつてたのは、僕たちが居なくなつた後のフローリア姫とエリーサちゃんのこと。そのことをおそるおそる先輩に聞くと、先輩は、「お前知らねえんだつたな。あの後、なかなかケツサクだつたぞ」と語つて、僕がこつちの世界に戻つてからのこと話を話し始めた。

* - * - * - *

【ねえ、ビク。田を覚まして。あたし、ビクのお嫁さんになるから、約束するから】

エリーサちゃんが大泣きで僕の身体を揺すぶるのを、みんながもう泣きしていいたときのことだった。僕がいきなりぱちりと田を開いて、

【本当に？ 本当に今度は逃げないで私の妻になつてくださいますか？】

と語つと、すつと立ち上がり優雅にお辞儀したのだやうだ。

【 × - ! マリー、あ、包帯してないからマリーじゃないわ、グール…】

エリーサちゃんはそれを見て、恐怖にひきつった顔をしてありつけの言葉で僕をアンデッド宣言。

【ひどいな、私はまだ腐つてしませんよ】

【もうすぐ、腐るわ】

死体だもの、とエリーサちゃんは小さな声でそれに付け加えた。

【それは困つたな。私はまだ、あと100年は腐らないつもりなんですが】

それに対しても僕は、いたずらっぽい笑みを浮かべてそう返す。

【マシュー、腐らねえぞ。第一死んでない、こいつ富本じゃねえんだから】

【さすがは鮎川さんですね。では、ちょっと失礼します】

何かを気づいた先輩に僕はそう言つと、王様の前にひれ伏し、

【王よ、ビクトール・スルタン・セルディオ、ただいま戻りました

と言つた。

【うむ、よくぞ戻つた。で、コーネタルは無事なのか】

【ビク、ビクトールって?】

エリーサちゃんが僕と言つたが、僕もどきのセルディオさんのファーストネームに妙な反応する。あれつ、セルディオさんの口振りではエリーサちゃんはセルディオさんのプロポーズを振り切つて逃げ出したみたいなのに、どうして彼のファーストネームを知らないんだろう。

【エリーサ様、王にじる報告申し上げたら、いくらいでもじる質問にお答えしますからね、少々お待ちください】

セルディオさんはエリーサちゃんに向かつて、人差し指を口に当てながらそつと言つと、王様にこれまでの顛末を話し始めた。

失策

【まずは、殿下の安否についてですが、殿下は確かに生きておられます】

セルティオさんの王子の生存宣言に、王様以下城のみんなから安堵のため息が漏れる。

【生きてはおられますか、今とても動かせる状態ではなく、とある場所でご静養いただいております】

【それはトレントの森か。しかし、そなたたちの搜索に当たった者たちが、トレントの森のそなたの屋敷にも行つたが、誰もおらんだと聞いておるが】

【はい、ご静養いただいているのはトレントの森ではございません。それどころか、このグランディールでもガッシュタルトでもあります】

それは、この鮎川様の世界である、“一ホン”と言ひ所でございます】

謁見の間にざわめきが起こる。

* - * - * - * - *

殿下が何者かに命を狙われているといふことは、私もよく理解をしておりました。何しろ、普段トレントの森に引きこもって研究三昧の私にその任の白羽の矢が立つたのはまさに、そやつの攻撃から魔法面で殿下をお守りするという意味合いでしたから。

恙無くガッシュタルトでの婚儀を終えた私たちは、姫様と別行動を取りました。敢えて敵方に連絡させる隙を作り、私たちは姫様の下を離れました。

そして、私たちは一人だけでトレンントの森を突つ切る道を選択したのです。よしんば敵に襲われたとしても、一個小隊程もある姫様の花嫁道中よりは身動きもとれるし、被害も少なくて済む。なにより姫様に被害が及ぶことがない。

それに、トレンントの森は私の庭とも言つべき場所です。敵方は私と同じように動き回ることはできないでしょう。あまり凶暴な魔物も棲息してはおりませんので、私たちは姫様よりも先に城にたどり着き、姫様をお出迎えできると算段していたくらいです。

しかし、敵方は私たちのそんな行動を予想してたかのように、森に最適の刺客 魔物使いを送り込んできたのでした。

何とかその魔物使いを返り討ちにしたもの、数多くの魔物たちによって私たちは満身創痍、特に殿下は一刻も早く治癒しないことには、お命も危ない状態。しかし、ここは辺境の森で、私より他に治癒できる者はなく、如何に私の魔力が高いといつても、一人で治療術を繰り出すのには限界がありました。

私はとんでもない間違いを起こしてしまったのかと、頭を抱えました。

しかし、窮すれば通ずと言つのでしょうか、一旦は肩を落とした私は、とある場所のことを思い出していました。

(あの場所ならば、そして彼らならば……上手くいくかもしけない)
そして私は、その禁断の呪文の扉を開いたのです。

失策（後書き）

いきなり、セルディオ語りにスイッチしました。彼、美久より性格暗いみたいで、いきなり語り口が硬くなつてしましました。

次回、そんなセルディオの王子救命大作戦です。

この世界には私たちの住むこのオラトリオの大地とは別に、いくつかの大地があるのです。その世界・仮に並行世界・と申し上げておきますが、その並行世界には私たちとそっくりな人々が違った生活を営んでいます。

実は私は11歳の頃、偶然ニホンに飛ばされたことをきっかけに、そのニホンのことを研究し、ニホンが魔法を介さずに病や怪我を治してしまった治療技術を持つていることや、私の映し身の美久に私が殿下に仕えるようになった同じ時期に殿下にそっくりな男、鮎川幸太郎氏と職場で出会つたことを知つていました。

最初、私はこんな強引な方法を探らず、ただ出かけていつて、幸太郎氏に殿下との交替をお願いするつもりでいました。

しかし、界渡りの呪文を唱えて私がニホンに現れたとき、彼らは道に飛び出してきた少女を避けて彼らの乗っている自動車という大きな鉄の塊を急旋回させてまさに道の端にぶつかろうとしていたのです。

私が殿下に仕える時期に美久が幸太郎氏と出会つたように、この並行世界では、環境の違いで出来事は違つてはいますが、こちらが危険になればあちらでも似たような事が起こるようでした。私は、とつさに時間を止める魔法をかけました。

私はどうしたものかと思いました。このまま時を進めても彼らは無機質な道具にぶつかっていくだけで、彼らもまた治療が必要になるのは目に見えています。

とりかえはや物語

私はまず、彼らの乗っている自動車のレプリカを作りました。内部などは全く分からぬので適当ですが、結果壊してしまって、何ら問題はないと思いました。そこに彼らが持っていた火の属性をもつ魔道具（美久はそれをチャ カマンと呼んでいましたが）を少量もらい受け、その上で、彼らを自動車」とグランティールへと送りました。

場所の特定まではする余裕はなかつたのですが、結果街道筋近くにたどり着いたようです。ただ、時間を止めた反動なのか、私たちが襲われてから約一月も経つてはいましたが。

一方、私はそのままトレントの森に戻つて殿下を二ホンにお連れし、レプリカを障壁にぶち当てた後、魔道具に炎系の魔法をぶち当て、大破させました。

そして私は、殿下とともにその大破した張りぼての中に倒れ込み、時を戻したのです。私自身も無傷ではありませんでしたし、高度な魔法を連発した衰弱も相まって、ほつとした途端私も一旦は意識を手放してしました。

* - * - * - * -

【しつかしまあ、よくそんなんで……お前が王子は無事だつて言うからには、ちゃんと王子は俺として病院で治療受けてんだろう？ 日本の警察はいつたい何やつてんだつて感じだな】

【ええ、しかし幾分衝突と言つには不可解な傷が多くあるにしても、私たちはあなた方の身分証明書を持参していますし、生存している間は治癒師の領分ですから、警備隊はそこまで関われないようです

し

【まあな。医者が必死こいて助けようとしてる時に、警察が茶々入
れても医者が怒鳴つてそれで終わりだうけどよ。それでもなんぼ
なんでも、王子目が覚めたら全部ちゃんとばれだうが】

私の説明に、幸太郎氏は半ば呆れながらそう返しました。

【ええ、ですから殿下にはじめにお連れする日途が経つまで歸り

の魔法をかけてあります】

ト、ヘルクン丸いのは、富本と
は至れり尽くせりなことで

幸太郎氏は、手を肩の所くらいまで挙げてつぶやくようにそう言い

一人の共通点 b ャ幸太郎

【王子の容態も日に日に良くなり、後数日もすればここからお連れしても大丈夫かと存じます】

【解った。セルディオ、そなたの今度のコータルの救護、まことにご苦労であった】

【いえ、それが私の仕業でありますれば、この命に代えますでも】
俺は、そう言って王様に頭を下げる事件の立役者の顔を見た。結局こいつは王子だけじゃなく、俺たちの命も救つてくれた訳か。

王様への報告が終了した後、俺は一番気になっていたことを聞いた。

【で、宮本はどうなつてんの。あいつ、切られたけど】

【あ、急所は外れていたはずですし、帰したところが治癒専門の場所ですから、治癒師が迅速に対応してくだされば、何の問題もないでしょう】

それに対し、クリソツ魔法使いはそう笑顔で答えた。まあどうでもいいが、さつきからこいつ、宮本に結構冷たいのな。ホントならお前が切られてたかも知んないのによ。するとこいつは、

【美久には悪いことをしたと思っていますよ。ただ、私ならばむざむざとあのようには切られたりしないと思いますが】

俺の頭の中の声が聞こえたかのよう、そう付け加えた。その表情は依然笑顔のまま。顔はそつくりなのに、あの天然ボケとは違つて性格悪つ！ お前口だけじゃなくつてホントに悪いと思つてんのかよ。

そうやって改めてこいつの顔をよくよく見ると、同じ顔なんだけど持っている雰囲気は全然違う。片や入社したてで怒鳴られまくっているペーペーのサラリーマンと、片や希代の魔術師と呼ばれた男。ま、同じ雰囲気を持つてゐる方が不思議か。こいつら、顔以外

に共通点なんかないかもな。あ、けど……

【あのひ、ちょっと気になつたんだけど、そもそもお前が1-1の時日本にすつ飛ばされた理由って何?】

【な、何でもよろしいではないですか】

俺がそう聞くと、それまで余裕こいていた魔術師は明らかに不機嫌になつた。

【もしかして、気に入った女に同性呼ばわりされて、ブチ切れた? お前女顔だし、ファーストネームのビクトールをビクトリアに間違われてとか】

【そ、そんなことある訳ないじゃないですか!】

とあからさまに取り乱して怒つた。おいおい、団星つてか。ま、富

本にはこいつみたいに魔力はないだろうから、飛びようなかつだけだけどさ、まるで一緒じゃん。『子!』って女名で呼んだとたんに怪力になる、ものすごく昔に流行った刑事ドラマみてえ。

バカウケしまくる俺を、女顔の魔術師はものすごい形相で睨んだ。なまじ、女顔だけに、怖えーっ(爆)

【それにしても、本当に二ホンの治癒術はすごいです。あの規則正しく薬湯が体に送られてくる管! 誰もいないときに起き出して何度も細部まで調べる誘惑に駆られことか!】

しばらく不機嫌全開だった奴が、次に言つて来たのがそれだつた。それからしばらく奴の日本の医療器具褒めちぎりトークが続いた。これもどつかで見覚えがあるよつなん?

【なんか、リルムの町のビクを見てるみたい】

とそのときぼそっと、マシュー改めエリーサがそう言つた。そうか、どつかで見たことがあると思ったら、リルムの町の胡散臭い商人の品物を見せてもらったときの宮本の顔だ!! R P Gと医療器具の

違ひこそあれ、それはまさしくオタクの証明。

やつぱり、こいつは正真正銘、富本のドッペルゲンガーだと俺は
思った。

ハッピーハンド？ bｙ幸太郎

【ヤーあて、殿下をお戻ししたらグラントディールまで責任を持つてお送りさせていただきますからね、エリーサ様。ところで鮎川様、二ホンではあの自動車なるモノは壊れている訳ですから、頑いても差し支えありませんよね】

自分の都合の悪いことから田を背けさせたいのか、女顔の魔法使
いは元非力な大男にそう言つた。今は、ちびっ子に戻つてゐるからあ
れだが、はじめの状態なら絶対にポジション逆だろ。

【ああ、今更あのポンコツが道端に現れでもしたら、それこそミス
テリーだからな。一応、助けてもらつた礼代わりにでも持つてけ】
俺は、それに対して頷きながらそう言つた。壊れたはずのポンコツ
がいきなりゾンビみたく現れても、俺、説明なんてできつこねえし。

【ありがとうございます】

【なんなら、あのポンコツの後ろに缶空……そんなもんこの世界に
ないか。ああ、リルムの町のあのゲテモノプリンの入れもんがあつ
た……あれでも、つり下げて走るか？】

それならいつそのことハネムーン仕様にでもすりやあいいんだと思
つてそう言つと、あいつは首を傾げながらむつとした表情で、

【は？ それは魔除けでござりますか？ そのようなものなどなく
とも、十分私がエリーサ様をお守りできますが】

と言つた。

【魔除け？ んな訳ないだろ。ま、こいつは俺のもんだから手を出
すなつて意味つてつちやそだらうな】

【じゃあ、何のため】

【ひつちじやや、結婚式が終わつた後、式場から出る新郎新婦がど
うつ腹にさ、『Just Married』とか書いた車で走んだ
けど、後ろのバンパーにあーいつのをつり下げるだ】

とはいへ、俺もそれは外国映画でしか見たことないけどな。

【そうなのですか、それは素敵です！まるで私たちを祝福する鐘を鳴らしながら走るようではありませんか！】

けど、それを聞いた口リコン魔法使いはにわかに色めき立つ。ま、本来もそーいう意味合いだっけか。にしてもお前、どーでもいいけど、この世界には存在しない車が鳴り物入りで走れば、とんでもなく田立ちすぎるぞ。それでいいのか、おい。確かに本物の魔物は寄つてこないだろうが、人も逃げるぞ、たぶん。

【ヤダ、あたしセルディオ様と一緒にには帰らない】
ほら、まず嫁が逃げた。

【どうしてですか！エリーサ様ははつきり私と結婚するって言ってくださいたじゃないですか】

【あれは、ビクに言つたんだもん、セルディオ様にじやないわ】

【ビクつて……彼の名前は美久、私の名はビクトーリオ。私の方が本当のビクじゃないですか】

【でも、どうして？あたしがお父様からきいたセルディオ様のお名前はスルタン・セルディオだけだったわ】

【そ、それは……】

【どうせ、その顔でビクトーリオつて名乗つたら『女みたい』って言われるのがいやだつただけだろ。お前どんだけ、顔と名前にトラウマもつてんだ】

【悪いですか？ですが、あなたのように体格にも名前にも恵まれた方に私の気持ちが解るものですか】

すると、コンプレックスの塊魔法使いは、そう言って逆ギレした。あ、女顔・女っぽい名前に加えてチビもその要素だった訳ね。そう言やあ、富本もそれ、気にしてたな。

【お前、そんなこと気にすんなよ。お前にはそれにあまりある位の魔力があるんだから。お前日本に居ながら、リルムの町とかで、俺たち助けたりしてくれてたんだろ】

【いいえ。私はもう一度殿下とあなた方を戻さないといけませんから。体力を回復するべく極力静養に努めておりましたよ】

【じゃあ、あれはマシュー、いやエリーサか?】

【「うん、あたしじゃない。あたしはマシューの体になつてるだけで精一杯で、余分な魔法なんて使えなかつたもん。別人になるのつて、すごく大変なのよ】

【んじや、一体誰が】

【あれは正真正銘、美久が一人でやつたんですよ。使つたことのない魔法をぽんぽん連発するからすぐ体力切れ起こしてましたけれど。鮎川様、美久に魔法を使いたいのなら、もっと体を鍛えなさいと言つておいてくださいね。いかに魔力があつても、それに見合う体力がなければ、最悪命を落としますよつて】

は？ あれは宮本がやつたつて？ だるまさんがころんだも、ガソリンも？ もし魔女発言の後、あいつが電池切れしてなかつたらと思つと、俺は血の気が全部引いちまつ氣がした。

もしあの、ゲーオタにそんな芸当ができると分かつてみろ、嬉しがつて何が起つたるか分からん。

(言わない、絶対に言つもんか！－)

俺はそう堅く心に誓つた。

そして数日後、無事日本に戻つた俺は、宮本が（こつちでは）初対面の英梨紗にいきなり口説いたと知つた。あつちの世界じゃともかく、この日本じゃ犯罪だぞ、おい。

俺には若干一人（あつちといつちで二名か）悲劇のヒロインが生まれたような気がすんだが……

ま、それでもとりあえずハッピーハンディッシュことで。

一小さなお姫様は小さな魔法使いといつまでも幸せに暮らしました

ん？？

あとがきに代えて

以上で、「道の先には……」完結させせていただきました。

このたびの3月11日の未曾有の大災害の中、このようなお気楽な異世界ファンタジーを書き続けることは、被災された方に失礼だと、お叱りを受けるかもしないと思い、一時は執筆しても公開は自粛しようと思つたりもしました。

ですが、本当はこの作品は昨年11月末までに完成しておかねばならぬものでした。（仲間内のイベントのため）

それより前の10月中に、友人に見せると約束していたものでした。

それが、9月に父が亡くなり、自分の中の勢いがなくなつてついつい不得手な異世界ファンタジーより「Hロ空（切り取られた青空シリーズのことをブログでそう呼んでます）」や「バニポイ」など自分が書きやすいものを優先して後回しにしてきました。

で、年末個人的にそのことを激しく後悔させる出来事が起き、私自身「明日の自分は自分にも分らないのだから、できる」とは今しておかねば」という気持ちで今回リアルタイムで公開に踏み切りました。

このおばさんから妄想を取つたら何にも残らないからです。今できることはこれしかなかつた。ごめんなさい。

もしよろしければ、このバカっぽい話で一時だけ大変なことを忘れて元気になつてくださいと思います。笑つてください。そんな気持ちで今日エンドマークをつけました。

なお、このお話を大好きな大好きな友人、祈君（仮名）に捧げます。

役者が揃つた？

やがて、長い昏睡状態がとけたことになつてゐる俺と、逆にぶつ倒れた富本とで、やつてきた医者やら看護師やらは騒然となつた。倒れている富本はもちろんのこと、俺の状態まで検査される。ビクトールは、

『たぶん、身体は調べられると思いますので、形だけ付けておきますね』

と、傷（本人がいないので、よく保つて一週間くらいだらうと言つていたが）を魔法で作り出した。こんなもんが作れんなら、張りぼりじゃなくつて本物の車も作れそうなもんだ。あんなポンコツよりもマシな奴をさ。ま、全く同じものしか作れないかもしない。俺はオラトリオだけ？あの世界にあのポンコツと同じ車がぞろぞろと並んでいる姿を想像して、笑うのを堪えたら、痛みを堪えたのと間違われて、

「痛みますか？」

と看護師に言われたんで、

「あ、ちょっと」

と痛がるフリをしなきゃならなかつた。ビクトールにあつちに飛ばされてなきや、生きてないのかもしないけど、何だかな。

そして、いつの間にか完治してゐる俺と、病院で寝てるだけなのがあり得ないほど疲労してゐる富本に医者は首をひねりまくつていた。

理由を知つていた俺は内心ビクビクもんだつたが、日本の医療機関にその真相が分かる訳きやない。結局その晩熱を出した富本は、どこかが炎症を起こしているのだらういうことで、抗生素質を点滴されている。

本当ならガザの実があれば一番いいんだらうが、よもや俺は富本がこつちに帰つて来てまで大魔法を使うなんて思わなかつたから、エリーサに残つてなんらくれとも言わなかつたしな。

翌日、三時の面会時間を持ちかねたようにエリーサがやってきた。いや、正確に言えば絵梨紗。二人は俺が隣にいることなんてものとせず、

「ビク、大丈夫？　お姉ちゃんにビクがお熱出したって聞いて、あたし心配で」

「大丈夫、心配しなくていいよ。ちょっとね……慣れないことしただけだから」

それに対して、富本はさすがに魔法を使つたともいえず、そう答える。

「ホントに？」

「うん、ホントに大丈夫。それに、エリサちゃんがきてくれたから、すごく元気出ちゃった。ありがと」

つてな具合に、いちやついてる。

ま、俺と富本と薫のドッペルがいたんだから、エリーサのドッペル？（絵梨紬のドッペルがエリーサが正解か、まあどっちでもいいが）もいても別におかしかないが、こいつら一つの間にこんなラブラブモードに発展してんだ？　俺なんか薫にキスして殴られて、そこから何も話進んでねえのに……

-なんか先越された気分だ。

ええーつ、じゅりもー？

富本と絵梨紗とのこぢゃいぢゃが見てられなくなつて、俺が病室を出たら、そこに薫が来ていた。

「目が覚めたからつて、とつととほつつき歩いて大丈夫なの？」

薫は口を歪めてそう言つた。

「ああ、医者が首を捻るくらい完全元通りだぜ」

ホントのことを言えば、最初から怪我なんかしてねえんだけど。それを説明できないし、説明する氣もねえけど。

「また、いい加減なことを言つ。ちやんと寝てないと、富本君みたぐぶり返すわよ」

とこづと、薫はやれやれといった表情でそつ返す。

「いい加減じやないか。薫、今あの灼熱地獄に戻れなんて言つなよ。自分の病室なのにいたたまれないつたらありやしねえ」

「ああ、富本君と絵梨紗のこと？ 確かにあれはね。ホント、いつの間にあんなに仲良くなつたんだか」

どうせあの単純な富本のことだ。オラトリオで惚れた女のドッペルに、運命でも感じるとか思つて迫つたんだる。それに、今んとこ10歳の絵梨紗は富本よりチビだからあいつのコンプレックスは刺激されないだろうしな。

「薫、小学生は夏休みだからともかく、お前仕事は良いのか？」
そのとき、俺は今日が平日だつてことに気づいて、薫がなぜ今こにいるんだろうと思つた。。

「うん？ 今日は有給……つてか、もつ私職場に戻れないかも」
それに対してもう一つぽい発言なんて聞き捨てならない。「何でだ

「うん、ちょっとね」「
びっくりして聞き返した俺に、薫の口は重い。

「俺のせいか？」

「違うよ、鮎川のせいじゃない！」

「じゃあ、何だよ」

「言わなきやダメかな」

「言わなきや解んねえだろ。それに俺に言えなに一つことは、直接じやなくとも俺らの事故が関わって思つて間違いないんだろ」

事故の一言に、薫の頬がぴくっと動く。

「じゃあ、結局、俺のせいじゃねえか

「違うよ……」

それでも、違うと言こ張る薫は、泣き声になつていて。お前、何隠してんだ？

「じゃあ何だつてんだよ……」

俺はだんだんいらいらしくきて、そう怒鳴った。

「鮎川、声デカい」

薫はいきなり急に声のトーンを落として小声でそう言った。ハツとしてあたりを見ると、声を荒げて言い合ひをしていた俺たちはいつの間にか他の患者や面会者に遠巻きに見られてくる。

「お前が、ちゃんと理由を言わないからだ」

だから、俺も内緒話みたいに、薫にそう耳元で囁いた。

「バレたの

すると、薫はぼそつとさう言った。

「誰に？ 何が？」

主語も述語もかつ飛ばしてしゃべんなつてんだ。何が何だかちつとも解んねえと思つていると、薫は意を決したよつたその理由を口にした。

「会社に、私が

「会社に、お前が？」

「櫻原宗十郎の孫だつてことがバレちゃつたの」

櫻原宗十郎ったら、ウチの会社の会長の名前じやん。

「へえ、お前、会長の孫だ……ええーっ、か、会長の孫……」

「だから鮎川、声デカいって……」

思わず俺が挙げてしまつた素つ頗狂な声に、薰はこめかみに手を当て、口をへの字に曲げてやつれてため息をついた。

ええーっ、あつちは本物の姫だが、こつちも姫級かよ。俺の方は向ひつけ玉子でも、こつちは完璧フツーのコーマンなのこだ。

「ちょ、ちょ、薰、外行いり、外」
俺はそう言つて強引に薰を病院の中庭みたいなところに連れ出した。

「そ、私は櫻原宗十郎の長女の娘、ホントは身内の会社になんて勤めたくなかつたんだけど、許してくれなかつたのよ。いくら武（社長の名前だ）叔父様に子供がないからつて、私にあそこで婿見縁おうなんて、前時代すぎよ。そんなの絵梨紗がいるじゃないつて思つたし、この前デビくんも生まれたから、やつと解放されたと思つてたのに」

観念して薰は事情を説明し始めた。とはいゝ、いまいち話が見えないが、薰は社内のだれかと結婚して、跡継げつて言われてた。でも社長んとこに待望の（デビくんつづーくらいだから男だろ）跡取りが生まれて、すべて丸く収まつたと、そんなとこだな。

「私は長女の娘だから櫻原（くわいばる）じゃないし、武叔父様に『私が絶対に櫻原家の縁者じやだつてことをバラさない』つてことを約束させて会社に入ったのよ」

じゃないと、思いつきり仕事できないじやない？　と薰は続けた。
確かに使う側としちゃ使いにくいだろーな。

「で、何でバレたんだ？」

「うん……それなんだけど、あの日絵梨紗と一緒に私もいたのよ」
あの日と言わせて、俺は「クリとつばを飲み込んだ。つて言つと、俺たちが事故つた日のことか。

「出かけたのが久しぶりだつたんで、絵梨紗が妙にはしゃいじやつて……道の向こうにほしかつたものを見つけて、思わず飛び出しちやつて……そこに来たのが」

「俺らの乗つてた車つて訳か」

俺の言葉に首だけで頷いた薰は、

「間一髪のタイミングで絵梨紗を交わした車は、ガードレールに吸い込まれるようにぶつかって火を噴いた。私、慌てて車の中をのぞき込んでびっくりしたわ。乗つてたのが鮎川と宮本君だったから」「薫はとっちらからりながらも何とか119番に連絡し、やがて救急隊員が来て、俺たちを車から引きずり出した。そしてその途端、車は再度爆発し、木つ端微塵になつたといふ。

「後少し救出が遅れてたらと思うと……」

薫はそのときのことを思い出して震えながらそつと云つたが、大方そればビクトールが車の張りぼてをこまかすために魔法で吹つ飛ばしてんだろう。満身創痍とか言う割に、えらく派手な演出じゃねえか。あいつ、どんだけ魔力があるんだか。

一方、衝撃的な事故を目撃してしまつた薫は、ショックでぶつ倒れ、一緒に病院に運ばれたらしい。俺たちが全然知らない奴らなら、ただ事故を目撃したで済んだんだが、事故の当事者が俺たちだつたため、当事者が一本の線でつながつて、薫が会長の孫だということが一気に社内に広がつたみたいだ。

それから、上司は薫の顔色を伺いながら仕事を持つてくるし、女たちからは今まで気楽にグチつてきた会社への不満やら悪口やらを薫が会社にチクつている様に思われて、シカトを食らうつになつた。確かに、薫は会社の悪口は言わなかつたさ。けど、ここつは誰の悪口だつて言ってやしねえぞ。

「ゴメンな、俺らのせいだ」

「ううん、鮎川たちのせいじゃないよ。鮎川は絵梨紗を助けてくれたんだし」

「なあ、薫……会社行きにくいんだつたら、辞めて俺んとこくるか」「俺は、手に汗をびっしょりかきながら、薫にそう言つた。地球とオラトリオがパラレルワールドつてんなら、オラトリオで王子と姫が結婚するんなら、俺たちも結婚するのが流れつてもんだろ。

「俺んとこつて、鮎川も一緒の会社でしうが、何変なこと言つてんのよ」「

だけど、薫は俺の言葉をプロポーズだと思わなかつたらしく、ゲラ
ゲラと笑いやがる。

「違う違う」

違うよ、鈍感女めが。

「何が違うのよ」

「だから、鮎川薫になれつてんだよ」

回りくどく言って解んねえんならストレートに言つてやる。

お前、俺にキスするぐらい好きなんだろ？ だが、それに対して薫
は、

「イヤだ！」

と、間髪入れずに即答しやがつた。なんだ、一発玉砕かよ。
何でだ？ オラトリオはパラレルワールドじやねえのか！？

「じゅあ、何で俺にキスなんかしたのかよ。富田のバカ話にホイホイ乗せられる様な歳じゃねえだろ、薫」

「4歳でおとぎ話のお姫様を地でいくとしたらいタすぎだろ。
「うつ、そんなの当たり前じゃん。でも今はヤダ。今辞めたら逃げたつて思われる。鮎川だって、せつと会長の孫つて分かつたから迫つたつて言われるよ」

「今辞めたら、今までこいつが頑張ってきたことなんてすっぱり忘れて、『それ見たことが、やつぱりお嬢様だ』とか言う奴が必ず現れるか。俺も逆玉狙いだって言われるだろ?」

「俺は、そんなもん何とも思わねえよ」

「周りが一夜にして変わっちゃつても?」

「仕事が変わる訳じやねえし、全員が敵になる訳でもないだろ。そんなもん、仕事で跳ね返してやるさ。お前も、負けたくねえんなら辞めないで一緒にいれればいいさ。けじわあ」

「けど?」

「俺と一緒に鬪おうや。一人で抱え込むのお前の悪い癖だぞ」

「俺は薫の今にも泣き出しそうなほっぺたに手を当てて、そう言った。どんな奴が相手でも、怯まずつっこんで行くところがお前の良いところだけだ。切り込み隊長にも、疲れたら帰る場所があつてもいいんじゃないねえか。

「鮎川あ、それってかつこ良すぞだよ」

「薫は、そつ言つて口をとんがらせて鼻水をすすつた。

「そつそつ、俺つてホントカッコいいだろ」

「あんた、自分が言ひつへ。」

あきれた、と薫。

「おお、言ひだせ」

俺は胸を張つてそう答えた。こんな、自分が言わなきゃ、誰が言

うんだ？ 他人にこんなこと言われたら、どんな裏があるのかと思つて逆に気色悪いだろ？

「薰、お前いつ田が覚めるか分かんねえ俺をずっと見ててくれたんだってな」

それから俺はマジな顔になつて薰にそつと語った。

「うん……」

薰は照れながら頷いた。

「もし俺が、この先ずっと寝たまんまだつたとしても、そういうふれたか？」

「たぶん、ね」

俺の頭ん中には、昨日の夜の宮本の説教じみたうわいとだか報告だから判んねえ、俺が寝てる間の薰の話が渦巻いていた。さつきはそつこーでふられたけど、ここはいっちょ踏ん張つてみますか。

「俺、起きちまつたけど、これからもずっと俺の傍にいてくれねえかな。つてか、夢の中でもお前は俺の嫁だつたし、なんか他の奴考えられねーんだよな、だから」

俺は、そう言つと、異世界よろしく田下の礼をとつて、

「谷山薰さん、俺と結婚してください」と一昔前の合コン番組みたく右手を差し出した。

薰は、ぱうぱう泣きながら黙つて俺のその手を握つた。

おはにひよ、踏ん張つてみますか（後書き）

何だか、完全にラブコメになっています。ファンタジー要素皆無。
でも、この2人をまとめないと、先のファンタジーに進まないんです（涙）
もう少し、ガマンしてくださいね。

元々怪我なんかしてなかつたから、検査したつてボロなんて出なくて、とつとと病院から解放されることになり、俺はちよつとビビりながら、会計に行つた。何気に豪華なあの一人部屋に50口あまり、カードの限度額超えなきゃ良いけどな。

しかし、俺たちの支払いはもう済んでこると言つ。

「ええつ、済んだつてどうこうことだよ」

「支払いの方は全部櫻原さんの方に回すよ」といに書かれてますが

びっくりした俺に、会計の女は事務的にそつ答えた。俺は後ろにいた薫を振り返ると、

「武叔父様が

と言つた。

「社長が？」

「絵梨紗の……そつ、絵梨紗の命の恩人なんだからつて払わせるなつて

と、薫が答えた。だが、それはなんだか奥歯にものが挟まつたような言い方だった。

「そりや、確かに助けたことには違いないんだろうけどさ、一つ間違や繰いてたかも知んないし、たまたま運が良かつただけだ。それにそこまでしてもらう筋合いはないと思うけどな。だけど、突っぱねて金額聞くにもあの部屋じやなあ。」ぐふつうの大部屋にしどいてくれりや良いのに

「う、うん、そうだね。じゃないと氣、遣うよね」

俺の言葉頷く薫の返事は相変わらず歯切れが悪い。

「礼を言わなきやと思つんだが、こんな個人的な事会社で言つわけにもいかないんだけどよ、電話で済ますのも失礼だし、お前5分でいいから時間取つてもられるように頼んでくれねえか」

「ううん、お礼なんて良いよ。叔父様がしたくてしてない」となんか
らね」「ひら

「そんな訳にはいかねえだろ」

「氣、気にしてないで。あ、そうだ、鮎川明日ウチにくるでしょ?
その時顔出し手もらうようつづいてくよ」

「げつ、社長呼ぶってか?」

薰と一緒に闘うと言つてプロポーズした手前、俺が次に出社する前にひとつと薰の親に『結婚を前提にお付き合い』の挨拶をしつゝこと言つことになつたのだ。まあ、一緒に聞いて認知してもらつてる方が風当たりは弱いかもしないが、父親だけじゃなくて、叔父さんまでに值踏みされるんかよ。頭痛え……

「うん、武叔父様には早めに会つておいた方が、いいと思つのよ。
そうよ、その方がダメージが少ないわ」

その後、薰がつぶやくようつづいて書つたのが聞こえた。

それにも、ダメージってなんだ? 受けるのは社長? それとも俺?? 僕は、何だから知らないプレッシャーやら不安をひしひしと感じ始めていた。

翌日、俺は薫んちに行つた。ナビが示すのは、超ド級の高級住宅街。都内に住んでても一回も行ったことがないところだ。

そして、俺は薫んちの前で盛大にため息を吐いた。何が、叔父様の家より小じんまりしてるだよつ 白亜の豪邸じゃんかよ。じゃあ、社長の家はどんなだつてんだ！

それもそのはず、薫の父親の谷山紀文は画家で、一枚書きや、ん千万だつづ一話だ。うええ、ますます俺、場違いじゃん。一回振られた時点ですんなり諦めとくべきだつたか。

ま、いつまでもビビってる訳にも行かないんで、とりあえずインターフォンを押す。はーい、という返事の後薫が玄関のドアを開いた途端……

家の奥の方から巨大な物体が俺に向かつて突進してきた。

「うわっ」

体当たりしてきたそれを、俺は転びそうになりながらも何とか受け止めた。

「げつ」

動く毛玉、いや犬、確かボルゾイつてやつだ。そいつは、俺の肩をがつしり掴むと、俺の口元を……

ペロペロと舐めだした。そのままディープキスされそうな勢いだ。よく見ると笑顔っぽいし（犬の感情なんて判んねえけど）尻尾振つてやがる。肩掴まれて首元にこられたときには、殺られるつて本気で思つたぜ。一応、ここん家の家族を分捕つてくアウエイな訳だし。獸は人間よりもそういうことに数段敏感らしいからな。

「ミランダ、こらつ止めなさい！ S i t ! ! 」

薫にそう怒鳴られて、巨大な毛玉もとい、ミランダは渋々と薫の前にちんと座つた。しかし、熱烈歓迎の意志は示したいのか、はあはあ言いながら尻尾だけはまだ振つている。

そこに薫の母親らしき女性が玄関に現れた。薫の外人度をさらりと上げた感じで、小紋をを小されいに着こなした姿は、どつかの旅館の名物女将っぽい。彼女は、

「あらあ、ミランダちゃんも女の子ねえ、イケメンはわかるのね」と言つてミランダの頭を撫でた。

「顔じゃないわよ、鮎川あんたサラミ食べたでしょ」

「ああ、正確に言えば、サラミの乗っかつたピザをな」

50日も留守にしてるんだ、冷蔵庫にあつたもんは調味料をのぞけば全滅、からうじてフリーザーに残つてた冷凍ピザだけしか食うもんがなかつたんだよ。昨日帰りがけにうつかりと買うのを忘れたんだ。でも、何でそれがサラミだつて判るんだ？」 薫は

「ママ、彼女は鮎川の胃の中のものに反応してるのでよ。ミランダ、いくり好きだつてあんたサラミに反応しそぎ」と言いながら俺を見上げてニヤリと笑うと、

「モテたんじやなくて残念だつたわね。この子サラミに田がないのよ」

と言つた。バーカ、犬にモテたつて嬉しかねえよ。サラミに惚れてくれて結構だ。

まあ、そのバカ犬のおかげで幾分緊張感が取れて、俺は通されたそれこそそこだけで俺のアパートの部屋の何倍あるんだつていうリビングで薫の父親を待つた。

「やあ、お待たせ。君が鮎川君？」

そして現れた薫の父親は、一人娘がかつさらわれるのだといつのに、さつきのバカ犬も顔負けの満面の笑顔だ。

「初めてまして、鮎川幸太郎です。」

俺は一旦座つていたソファーから立ち上がり深々とお辞儀をする。「谷山紀文です。退院おめでとう

「ありがとうございます」

俺は、礼を言つた後、咳払いをして、いきなり本題をきりだした。

「今日はですね、お嬢さんと結婚を前提におつ……」

しかし、紀文氏は俺の口上が終わらない内に、

「そんな堅いことは抜き抜き。鮎川君薫と結婚したいんでしょ。どうぞどうぞ、こんな面倒臭いので良かつたら、是非」と、せつせつ俺たちの結婚を承諾してしまったのだ。それにしてもノリ軽つ！ しかもトドメに、

「いやあ、君がずっと眠つたままだつたらどうしようかと思つてたんだよ。それでも生きてるんだから、そちらのじ両親に承諾もらつて病床で式だけ挙げようかとか」とまで言つ。こつちが言い出す前に親公認なのも何だかなんだが、意識のない奴と結婚させようだなんて、どんだけ薫を追い出したいんだか。ホントに血つながつてんのか？ 母親の外人的要素の方が際だつて、いまいち判らねえぞ。

「パパ！！」

さすがにその発言にブチ切れて薫が思いつ切り父親を睨む。

「じょ、冗談だよ、薫。さすがに眠つたままの人間を後継者にするなんてお義父さんが許さないさ。でもね、私は嬉しいんだよ。大事な娘を絵描きになぞやるんじゃなかつたつて、そりや肩身の狭い思いをしてきたんだから」

まあな、父親としちゃいくら金取れるつてつたつて、絵描きなんて次売れるか売れねえか分かんねえヤクザな商売認められねえよな、当の会長は結構でけえ会社のTOPな訳だし。解るよ、何か一力所聞き捨てならねえ事聞いた氣もするけど、取りあえず薫の親の反対はないつてことだな。

・ピンポン・

その時、インターフォンがなつたかと思うと、だだだだつと廊下を走る音がして、

「間に合つた？ 僕間に合つた??」
と飛び込んできたのは、我が社の社長、櫻原武氏。しばらくして、そもそもと絵梨紗も入ってきた。

じゃあ、「」から「」挨拶第一「ラウンド」突入ってか?

「間に合つた？ 僕間に合つた？？ 紀文ちゃん」と薰の父親に聞く社長。それに対して、当の紀文ちゃんは、野球のアウトサインをしながら、「うーん、ギリギリアウトつてここかな」と笑顔で言う。

「じゃあ、日取りとかも決まっちゃつた？ いつ、いつ？」日取りつて結婚式の日取りか？ つつか、なんだこのぶつ飛び具合は。社長せっかち過ぎねえか？ 僕は今日、薰と付き合つ宣言しに来ただけだぞ。そう思つてると薰が、「武叔父様、飛びすぎ。まだ、そこまで行つてない」と言つて社長を睨む。おお、会社では絶対にあり得ねえな。「じゃあ、僕のサポートの件は？」

「まだ！」

「じゃあ、取締役会の件は？」

「それもまだ！！」

「じゃあ、全然間に合つてるんじやん、僕」

矢継ぎ早に俺の解らないことを質問した挙げ句、そんな話はしてねえことを知ると、社長はホツとむねをなでおろしていた。

「そういうのは、ウチには関係ないからね、タケちゃん」

「ひどいな、櫻原には大事な問題なんだよ」

そして、紀文ちゃんのその言い分に、社長改めタケちゃんはむくれながらそう返す。タケちゃん、普段とぜんぜんキャラ違うくないですか。その日本人離れした顔で小首を傾げると愛くるしいっちゃそうだけど、歳考えるとカテゴリー：かわいそうな子だよなあ。

「あ、社長。入院中はいろいろありがとうございました。ホントあんなすごい部屋にずっとといさせてもらつて恐縮です」

俺は、そんなタケちゃんの変わりつぶりに面食らいながらも、忙し

い中折角来てもらつたんだからと、お礼の挨拶をする。

「いーのいーの、気にしないで。可愛いベスの命の恩人に窮屈な思いをさせたら、僕がパパに叱られるもん。それにさ、未来の社長の部屋としてはチープな方だよ」

ベス・エリサベツ・エリーサ・絵梨紗か。けど、未来の社長ってなんだ？？

「俺、話が見えないんですけど」

「えつフロリーから聞いてないの？ フロリーの田那様には漏れなく櫟原がついてくるつて話。

とは言つてもさ、せんぜん櫟原に関係ない子が来ちゃつたらどうしようかつて思つてたんだけど。でね一応、調べさせてもらつたよ、鮎川幸太郎君。で、合格！ 文句なしだよ。フロリーちゃん、グッジョブ。ううん、見る日あるよ」

社長は今にもとろけ出しそうな満面の笑みだ。そんで、フローリアでフロリーか……イヤイヤ、問題はそこじゃないつ、未来の社長だ。聞いてない、聞いてないぞそんな話……

「社長！ どうして俺が社長やんなきやなんないんですか……」

「じゃないと、僕が辞められないもん」

俺の問いかけに、社長がウルウルの瞳でそう答える。

「社長つてまだ40代でしょ」

「うん、48。今年49になるよ」

だから、アラフィフ男が小首を傾げてしゃべるんじゃない！

「まだ、引退するような歳じゃないじゃないですか！」

思わずそう叫んだ俺に、タケちゃんは徐に一冊の本を取りだした。

熱烈歓迎！ 2（後書き）

うつ、まだ終わらない。濃すぎる薫の身内たちに、作者まで圧倒されます。

社長改めタケちゃんが会社を辞めたがる理由は次回。

タケちゃん（もつ、社長と呼ぶ気がしねえ）が差し出したその本は最近話題の市原健の恋愛小説。作者の経歴おろか性別さえも（ただ、名前からして男性だつて思うが、何年か前に本 大賞を取つた作者は男っぽい名前だけど、女だつたりしたしな）不明な謎の作家の作品だ。タケちゃんはその本の名前の部分を指さして、

「これ、僕」

と言つた。2歳児みたく2語文じや、何言つてんのか解んねえ。

「へつ？」

「一応音だけは本名なんだよ。だけど、誰も僕だつて気づいてくれないから、寂しいんだよね」

タケちゃんがそう言つてため息を吐く。

「市原 櫻原、ぜんぜん違うじゃ ないですか」

どこが一緒だ。

「あのね、櫻の木はいちごの木とも呼ばれていてね、みんなが読み間違えるから社名はくぬぎはらにしきやつたんだけね、元々の読みはいちはら」

それに、櫻つて画数多いから面倒だし、本名で書くのもね、とタケちゃんは続けた。

「僕の書いた文章に紀文ちゃんが絵をかいてさ、一緒にやうつしていつたのに……紀文ちゃんたら、一人で絵を描いて勝手に有名になつちゃうんだもんなあ」

タケちゃんが文章を書いて紀文ちゃんが挿し絵か。それとも一人で漫画家にでもなろうとしていたんだろうか。

「タケちゃんには、会社があるだろ。タケちゃんまで引っ張つたら俺、お義父さんに殺されるよ」

まあ、嫁にやってその上跡取りを別の仕事に持つてかれたら……思いつきり立場悪くなるよな。

「紀文ちゃんも描きながら会社手伝ってくれたらいじやない」「片手間でできるひつぢゃないだる。会社潰して良いんだつたら手伝つけど?」

タケちゃんの言い分に紀文ちゃんはしれっと微笑み返す。

「ふん、紀文ちゃんは僕よりエミナちゃんを取つたんだ」

普通そだろ、嫁より嫁の弟取つてどうする、という紀文ちゃんにタケちゃんは口をへの字に曲げて黙り込む。なんつーか、まるでガキの会話だよ。

「ま、そつ言つことだから、タケちゃんのこと手伝つてやつてくれないかな。君にも譲れない夢があるのなら別だが」

そんなタケちゃんを生温かい目で見ながら紀文ちゃんが父親の顔に戻つて俺に言つ。

「俺にそんな大層な夢なんかありませんよ。社長なんてガラジやないんですけど、サポートつてことなら構わないですよ

「やつたあ、ありがとうーー！」

取りあえず承諾した俺に、タケちゃん破顔で俺の手を握りブンブン振り回した。うー、なんだかな。早い遅いに関係なく、俺ダメージ大きいかも。

「それじゃあ、早速僕の見習いつてことで、秘書課に異動かけとくから。今まで君がしていた仕事、入院中に全部ほかの社員に振り分けられるからね。そのまま異動できる。ほんとラッキーだよ」

「げつ、すぐに異動つてか？ それも秘書課かよ。」

「後は、結婚式だね。櫻原の社長の結婚式として恥ずかしくないものにしなきやね」

タケちゃんは、会社から足抜けができると決まつたからか、上機嫌でそう言つた。この分だとあつと言つ間に会社投げてこられそうだな。安請け合いで良かつたのかな、俺。そう思つてると、今まで黙つていた絵梨紗が、

「お姉ちやまは結婚式かあ、いいなあ」

と盛大にため息をつきながらそう言つた。けど、続けて言つた、

「あたしも、ビクと結婚したいな」という言葉にその場にいた全員の動きが止まった。

繰り上げ当選？

「ベス、ビクつて誰？」

タケちゃんが聞き捨てならないと絵梨紗にそう聞く。それに対しても

「ああ、本名^{おやもと}宮本美久、彼女の命の恩人その2ですよ」

俺が代わってそう答えた。

「じゃあ、幸太郎君と一緒に乗つてたつていう？ ビクつて言つから、ベスの学校の友達かと思つちゃった。日本人んでしょ、何でビク？」

学校の友達つて言つから聞いてみると、絵梨紗はアメリカンスクールに通つているらしい。

「ええ、ベタベタのネイティブ日本人ですよ。よしひさつてのは、美しいに久しいつて書くんですよ。つい最近ちょっと外人と知り合いになつて、そいつがよしひさつて発音できなくてヨツシャにしか聞こえないから、それなら俺が音読みでビクつて呼べば良いつてついに教えたんです」

正確に言えば、外人じゃなくて、異世界人だけどな。そう言えば、ビクつて呼ぶ元になつたマシュー改めエリーサは、宮本との別れ際、泣きながらよしひさと発音しようつと懸命に頑張つていたつけ。そんなことを思い出してると、タケちゃんは俺をリビングの隅に連れて行くと、小声で、

「ねえ、宮本君の方はベスの事どう思つてるの？ ベスの独りよがりとかじゃない？」

と聞いた。絵梨紬はまだ恋に恋する年頃、命の恩人に優しくされて、その気になつてるようなことを心配してはいるのだろう。

「いいえ、残念でしようけど、しつかり両想いですよ

寧ろ、宮本の方がお宅の姪御さんに夢中です。

「ふーん、そうか……ベス、ホントにビクくんのお嫁さんになりたいの？」

「うん、なりたい！」

なれるの！？ とその一言に身を乗り出す絵梨紗。

「でもね、ベスが結婚できる歳になるまでまだいぶあるし、それまでに気持ちが変わるかもしれないから、一応仮押さえってことで、富本くんも一緒に秘書課に異動させるよ。このままうまく行くようなら、君の補佐をしてもらつ。その方が君も気分が楽でしょう？」
でね、最初は君が僕のところにきてもらうつもりだったけど、絵梨紗の彼氏をパパにつけるのはちょっとさすがにアレだから、君がパパの方に回ってくれる？

思ったより、僕早く辞められそうだね、君は痛い思いをしただろうけど、僕としてはホントに良かつたよ

タケちゃんは嬉しそうにそう言つと、まだ仕事があるとさつさと帰つて行つた。まったく、自分が言いたいことだけ言つて行つちまつたぜ。

その後……

タケちゃんはそれから半年も経たない内に青木賞にノミネートされてしまつた。受賞後呆気なく素性をカミングアウト。社内は蜂の巣を突いたような大騒ぎとなる。それで、タケちゃんが未だ独身であることが発覚。

「じゃあ、デビくんは一体誰の子なんだ？」

と聞いた俺に、

「あれ？ 言つてなかつたつけ？」

と、薰。そこで俺たちは、デビくんこと本名櫻原英雄（英名デビッド）は会長の30歳年下の再婚相手、クラウディアさんとの間にできた、タケちゃんにとつては義弟だった。ちなみに絵梨紗は英雄の姉。つまり、タケちゃんの義妹。
「じゃあ、絵梨紗は義理の叔母？ つてことは、あの二人がくつつきや富本は俺の義理の叔父になつちまうつてか！？」

それを聞いたとき、俺がそんな雄叫びを上げてしまつたことは言
うまでもない。

繰り上げ当選？（後書き）

以上で、番外幸太郎編、一段落です。

次回よりオラトリオ組の話に戻ります。わーい、やつとファンタジーだよ。

てな訳で、次は「希代の魔術師」の方でお会いしましょう。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（前書き）

本編から、一年後位。新章の少し後へりこのお話です。

綺麗なお嬢さんは好きですか？

今日は久しぶりのお休みで、絵梨紗ちゃんピーテート。

待ち合わせに現れた絵梨紗ちゃんは小花柄のチュニックに白いレスのミニ丈のティアードスカートに、編み上げサンダル。まるで絵本から出てきたみたい。僕は鼻血が出そうになつて、思わず鼻を押さえた。

行き先はビルの森の中にある水族館。海の生き物には本当に癒される。特に、勇壮に勢いよく泳ぐマグロの大群は本当に……。うう。そう。そう思つたら無性におながが空いてきた。それもそのはず、そろそろお昼だ。

マグロを見た後だつたんでも僕の口はどうちかと言えばお寿司を要求していたんだけど、とりあえず絵梨紗ちゃんの意向を聞いてみる。「何か食べたいもの、ある？」

すると、

「うーん、ケバブ食べてみたい。確かにこの辺においしい店があるって聞いたんだ」

という答えが返ってきた。ケバブといつのほトルコ料理。平つたく言えば焼き肉みたいなものだ。まだまだ小学生の絵梨紗ちゃんは、ご両親が谷山先輩としかこの街にきたことがなく、歩きながら頬張るようなその店のケバブは、お行儀が悪いと食べさせてもらえないかったのだという。

その教育方針をあつさり曲げて一緒に買い食いしても良いものなのかと思わなくもなかつたけど、僕の貧しい口はケバブと聞いたらけで口の中に肉汁を待つ始末だったので、あつさりとその誘惑に負けて彼女の言うケバブのお店に向かい、ドナルケバブを一つずつ買いい、食べながら歩いた。

半分くらい食べただろうか、その時僕は、

「ヨシ、久しぶり」

と呼び止められた。振り返るとそこには中学時代の同級生の佐々木がいた。

「久しぶり、元気だつた？」

「おう、まあまあ。なんとかもぐりこんで会社員やってるよ。ヨシは」

「うん、僕も似たようなもん」

と僕たちはお決まりの挨拶を交わす。すると、佐々木は絵梨紗ちゃんに眼をやつて、

「ところで、横にいるのは、妹……じゃないよな。おまえんち男ばつかだつたもんな。カノジョ？」

と言つた。僕は男ばかりの3人兄弟の末っ子だ。佐々木はそれを知つていて、

「うん、ああ」

と、それに僕は適当に相槌を打つ。すると、僕を横目で見ていた絵梨紗ちゃんが、

「はじめまして、富本美久の婚約者の櫻原絵梨紗です。富本がいつもお世話になつてます」

と言つて、佐々木に頭を下げる。見るとちょっとぴりふくれつ面だ。恋人として紹介してもらえたのが不満らしい。

「こ、婚約者あ！」

一方、それを聞いた佐々木は信じられないというのがありありと判る顔をしている。

「うん、一応」

別に隠したい訳じゃないんだけどね、やっぱり婚約者って響きは照れくさいから。僕がそう思いながら頭を搔いていると、佐々木は俺の腕をとつて強引に5~6メートル向こうに引っ張つていくと、

「お、お前、婚約者つて、あの子いくつだ」とひそひそ声で聞く。

「うん？ 12」「

この間誕生日がきたから、12歳になつたはずだ。

「 12 ! ?

絵梨紗ちゃんの歳を聞いて佐々木がまた素つ頬狂な声をあげる。

「お前それ、犯罪だろ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ、アブナイことなんかしてないから、犯罪じゃないよ」

佐々木の言いぐさに、僕は不満がましくそり答える。

「でも、婚約者なんだろ」

「結婚してるわけじゃないし」

「結婚できないの間違いだろ」

佐々木はそう言ってため息をついた後、ニヤリと笑うと、

「それにしてモシンが口りだつたなんてな」と言った。

「な、何だよ、それ。そんなんじゃないよ

「じゃあ、政略結婚か？」

「そんな政略立てるほど金持ちじゃないよ」

「だろ？ 何にしたつて、自分の半分の歳の娘と結婚しようなんて考える時点で口り決定だろうが

「あ、これにはむ、いろいろ深い訳があつて……」

絵梨紗ちゃんはエリーサちゃんで、エリーサちゃんは最初マシューで、僕は彼女が大男だったときから好きだから、決して口りコンなんかじゃないと心の中では言いつつ、でもそんな夢の話をするわけにもいかず、口ごもつた。僕の答えに佐々木は、

「ま、な。小学生ならお前より背が高いなんてことないもんな、でもあの子ハーフっぽいじゃん。その内逆転するんじゃね？」

と返す。「ひつ、内心気にし始めてることをひつと並んでない！ そうぞ、愛情は身長じゃない、身長じゃない……と思いたい。」「ねえ、ビクいつまでお話してるの！」

そのうち、男たちのひそひそ話に痺れを切らせた絵梨紗ちゃんが仁王立ちで怒っている。

「あ、悪い。引き留めちやつたみたいだな。それにしても『ビク』

なんて呼ばれてるわけ？ ヨシ

すっかり今から尻に敷かれてんじょんと、佐々木は吹き出した後、「俺はやっぱ、きれいなおねーさんの方が良いな。カノジョにおねーさんとかいないの？」

「いるよ」

「おつ、その子いくつ」

「25」

「俺らより年上？ いやあ、歳離れてんだな。けど、年上もそれれるねえ、是非紹介してよ」

佐々木はにやにやしながら、僕にそう言つ。

そう、絵梨紗ちゃんには確かにお姉さんがいる。僕、ウソは言つてない。

だけど、その人僕の先輩の奥さんなんですけど。先輩に殺されてもいいんなら紹介くらいはしてあげるけどね。

（先輩今、超デレモードだからね、何されても責任持てないよ。それでも良いんだつたらね）

僕は心中で佐々木にそう言つて、口角をあげた。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（後書き）

タケちゃんがほとんどの作家業にいそしむ中、きりきり舞いしている
美久と絵梨紗の水族館デートでした。何か、美久食い気で動いてま
したけど……

で、このお話はここで閉じようと思います。新章は別枠でR-15
(つてほどにはならないかも知れませんが、保険です。その方が思
いつもりはじけられますから) フラグを立てることにしました。

幸太郎が宗直替えして超テレモードになっている理由がそこで明ら
かにされる……はず。

よろしければお付き合いください。

天使様との出会い

「え、最悪だわ……」

私は、某高級ホテルの廊下で動けなくなっていた。着物を着ていたせいで、ホテルの毛足の長い絨毯に足を取られて、私は豪快に転んでしまったのだ。こつそり出ようと人気の少ない駐車場に向かっていたので、誰にも見られなかつたのが幸いだけだ。

考えたらママ、朝から拳動不審だつたのよね。

「引き出しの奥からママの若い時の着物が出てきたのよ、着てみる？」

つて、鼻先に突き出された。呉服屋の娘だつたママはたくさん着物を持つていて、確かにそれはママの若い頃のものだつたけど、持っているだけにちゃんとカテーテゴライズされていて、思い出したように出てきた代物じゃない。

先生の先生がお見えになるから、迂闊な格好はできないのでママも着物で行くつていうし、私も呉服屋の孫娘、基本的に着物は嫌いじゃない。

ただ、たかがカルチャースクールの発表展示会がこんな有名ホテルで行われる訳ないつてことにもつと早く気づくべきだつたわ。

そう、用意されていたのは、ママのカルチャースクールの発表展示会じゃなく、私のお見合いだつた。向かおうとしているラウンジに展示物が一つもなく、ちょっと頭の薄くなつた男性が座つているのを見てことを察して激怒した私に、ママはしつと、

「だつて、36にもなるとお話を持つてくれること自体が稀なのよ。それに更紗ちゃん、最初からお見合いだなんて言つたらじべもなく断るでしょ」

と言つた。だからつて、だまし討ちばかりつかと思つ。

それで仕方なく私は席についたんだけど、この相手の男性がまた、

くでくでしててどうも煮えきらないのよね。話を聞いていてイライ
ラしちゃう。

で、私はトイレに行くフリをしてその場を抜け出してそのまま逃
走を図るとしていたのに……マズった。

「お嬢さん、大丈夫ですか」

その時、頭の上で声がした。

「はい、Y e s 」

そこにいたのは、スーツを着た外人男性。下から見上げているので、豪華なホテルの照明に照らされて、まるで天使様みたいだ。あわてて英語で話そうとするけど、言葉が出てこない。

「えつ、僕ちゃんと日本語で話しましたよね。心配しないで、僕半
分は日本人ですから」

すると、天使様は困ったような顔でそう言つた。は、ハーフなんだ。
顔から火が出そつ。

「あ、すいません」

「いいえ、最近でこそあまりなくなりましたけど、結構よくそういう反応はされてるので、慣れてますよ」

天使様はそう言いながら、私に手を貸してくれた。

「イタツ」

だけど、立とうとした私は、左足首に激痛を感じた。

「ああ、足捻っちゃったみたいですね」

天使様はそのまま屈んで私の足袋を脱がせると左足を見た。あちやー、どうしよう、やつちゃつたわ。でも、

「どうしよう、早く逃げなきゃいけないのに」

思わず口を出た（最近思つてることをついつい口に出しかねるのよね、歳かしら）言葉に天使様は、

「えつ、君も逃げなきゃいけないの？」

驚いてそう言つた。でも、「も」って何？

その時、

「タケちゃん、タケちゃん！」

と焦ったような男性の声がした。

「や、ヤバい。見つかる」

天使様は舌打ちしながら小声でそう言つと、

「君も逃げなきゃいけないんですね」

と言いながら、軽々と私を抱き上げ、

「じゃあ、このまま一緒に逃げますか」

と、駐車場に向かつてスタスタ歩きだした。

天使様との出会い（後書き）

はーい、「赤パニ」で最後に美久が言っていた武の小ネタ入ります。

武が逃げている理由は……もう、お解りですよね。

尚、これはファンタジーではございません。

ま、50歳と36歳の恋愛はある意味ファンタジーなのかも知れませんが。

こんなのでよかつたらお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006r/>

道の先には.....

2011年11月4日15時31分発行